

# 芥川だより

発行日\*\*\*2016年12月1日 e-mail:akutagawa\_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL 072 - 681 - 8870

梵

\*\*\*\*\* 一部100円です \*\*\*\*\*

## 冬の風呂焚き



雪が降る夕暮れ時、バケツで水をくみガラス戸越しに五右衛門風呂に入れる。何回も水屋と風呂を往復し湯船に半分ほど水をためる。少しでも楽をしたいのだが、最後に風呂へ入る母が「いつも湯が少なくてかなん」とぼやくから頑張っって水を運ぶが、水が多いと沸かすのが大変だから適当なところでやめる。

風呂に木の蓋をして焚口に火をつけ燃やすのだが、なかなか火が思うようにつかない。枯れた豆枝をもってきて一気に燃やすが割木に火がつかない。仕方がないから家の裏に積んである柴の束から燃えそうな小枝を持って来て割木の下に差し込んで火をつけなおす。火吹き竹で火を消さないようにしながら吹き続ける。何とか火が割木に移り燃え出すとさらに幾本かの割木を足して焚口を半分塞ぐ。

玄関の左手に小便用の便所と下に大きな溜め、横に風呂という配置である。茅葺屋根のひさしの下に風呂の焚口があって風の強い日などは焚口の火があおられて怖い。私は勢いよく燃える火が上のひさしの茅に移らないか心配であった。寒いのを我慢してできるだけ火の番をしたいのだが、底冷えする夕方はハンテンを着込んでも寒いから家の中と焚口を幾度も往復する。

小一時間もすれば湯も熱くなって来る。熱めの湯が好きな父か祖父が先に入り、ぬるめが好きな私か母が入る。誰かが風呂に入ると湯加減を聞きに行きぬるいと言えば追い炊きし、熱いと言えばバケツで水を足す。

私は、風呂に入るのも嫌だった。下着姿で玄関を出て寒い外をほんの少し通るだけなのだが身震いがして風邪をひくように思えるから、いそいで風呂場へ上がり湯船につかった。身体を洗うこともなく湯船に飛び込み熱くなった鉄を避け底板に座るが、辛抱できずにすぐにあがってしまう。

今の生活からは考えられないような半世紀まえの山村の風景だが、見方をかえればずい分贅沢な時間を過ごしていたのだと思えてならない。

死をめぐるあれやこれ(27)

石川 吾郎

「一九四五年度のウエルギリウス」

秋の京都恒例、百万遍の古本市で見つけた古びた薄い雑誌「世代」昭和二十一年十月号。この中に若き加藤周一の「一九四五年度のウエルギリウス」という文を見つけた。

いわく、「国家総動員法の木馬は危険である」と尾崎行雄は言った。議会はそれを通した。然るに尾崎行雄を非難して、御用議会と共に総動員法に喝采した東京市民は、その木馬の腹から東條一味が躍り出し、戦争をはじめて、東京が焼かれ、住むに家なく、食うにもなき状態に追ひこまれても、よもや往年の喝采を忘れないであろう。一九四一年十二月八日に、軍国主義を謳歌した者は誰か。ハワイ攻撃の映画が「面白い」と言った者は誰か。それは（この道は破滅への道だと警告する）カッサンドラを信ぜぬトロイヤ市民自身ではなかったか。」

加藤はここで、ウエルギリウスの『アエネーイス』で語られたトロイの木馬の有名な落城のエピソードに、戦争期の日本の状況を見いだしている。

そして他ならぬ、現在のこの国に進行していることが、驚くほどこれに似ていると、声高く叫びたい衝動に駆られるのを、私は止めることができない……。

（尚この文は、講談社文芸文庫『一九四五・文学的考察』に収録されています。）

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
マスコミが伝えないニュースの側面	伊藤明	2
医療側でも相談室	伊藤明	4
素老人☆よもぎ帳	坂本一光	5
ドイツ哲学の旅々 精神世界編	祖蔵哲	6
大峰奥駈道	梵店主	10
おちよこチヨイぼけ	A O	11
父のシベリア俘虜記	若山哲郎	12
大人の今昔物語	石川吾郎	15
B級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	16
オクラの山たより	困了生	18
英国コッツウォルズウエイを歩く	富田保子	19
米国紀行	河原林成行	20
孫ワオツチング	福田圭	21
編集後記	嘉	21
女90年の軌跡	眞粧	22
俳句	土田裕 影山武司	22

## ◆はじめに

この一ヶ月の最大のニュースは、やはり米国の次期大統領にトランプ氏が当選したことでしょう。アメリカのほとんどすべてが、クリントン支持を打ち出し、トラン

## ◆はじめに

伊藤明

## ◆はじめに

プのバッシングをしていたことを考えれば驚くべきことです。それほどに米国民は、これまでのオバマ政権ではびこった巨大企業による国民の収奪にNOを突きつけたといえます。しかしその肝心のトランプ氏の素性ははなはだ怪しく、政治姿勢についてははまだ未知数で、今後を注意深くみていく必要があると思われま

す。ただトランプ氏が選挙中に有権者との契約として公やけにした主要な政策は変更することができないものと思われま

す。特に大統領就任の初日に撤退するとしたのがTPPです。

日本国の首相である安倍氏は次期大統領にほぼ当選したといえども、その時点ではまだ一人であるトランプ氏に面会をもとめ、わざわざニューヨークのトランプ氏の住居トランプタワーまで出掛け（これはまさに植民地の代官が、もみ手で、新しくなった宗主国の旦那さまに挨拶に行つた図を思わせます）TPP締結を説得したというのですが、その翌日に、トランプ氏はTPP撤退の声明が出たのでした。まず、こんなに情けないトップをいただいている国が、わが国なのだ、ということを確認しておく必要があるでしょう。

## ◆前回のまとめ

前号では「TPPが発効したら医療はどうなる？」として、近未来の日本の医療について考えました。その要点をまとめてみると、

●混合診療が導入されて、医療に格差が持ち込まれる。

●新薬の値段がうなぎ登りになる。

●保険適用の範囲が狭まり、自己負担率が引き上げられる。

●「高額療養費」制度も存続できなくなる。

●医療や福祉・介護とは相容れない、株式会社病院経営を進めていく。その結果医療と福祉・介護が金儲けの対象にされてしまう。

●最終的には国民皆保険制度が壊されていく。

●その先には米国の現状かそれ以下の状態、つまり病气やケガをしても医療を受けられない、医療費で破産をするという、映画「シッコ」で報告される米国の地獄世界が日本に再現される。（詳しくは前号のこの記事を読んでください）。

これらは要するに、国が国民の健康や生命を守る義務を放棄してしまう。そして我々国民は受けられる医療に格差が導入され、医療の質も金次第となってしまう。国家と国民の最大のセーフティネットである国民皆保険制度が破壊されてしまう、ということでした。

しかもここで注意を要するのは、これらのことはTPPが発効しなくても、安倍政権は様々な形ですでおしすすめているのです。ですからトランプ次期米大統領がたとえ就任初日にTPPから撤退を宣言しても、それで話しは終わりません。

◆なぜ安倍政権は、成立しないTPPに固執するか？

国会では成立する見込みのなくなったTPP関連法案を、安倍政権は国会を通すことに躍起になりました。そして今国会でTPP関連法案が国会で承認されてしま

うことはほぼ確実になってしまっています。

しかし、安倍政権がなぜここまで、もう成立の見込みが全くたたなくなり、意味のなくなったと見えるTPPにこれほど固執するのでしょうか。テレビでは安倍政権が成長戦略の中心と位置づけたTPPがつぶれるとメンツがたたない云々、といったことが流されていますが、政府はそれほど愚かではないでしょう。この裏にはそれなりの理由があると思われま

す。それは、安倍政権が誰のためであるのかのことが、安倍政権が誰のためであるのかを雄弁に語っていると思われま

す。実はTPPの批准は国の解体を正当化してしまうことを意味しているのです。

TPPを批准すると、いつ発効してもよいように国内法がTPPに合わせて改正されて行くこととなります。またTPP関連法案自体はTPP発行後に発効することになっていますが、安倍政権は「国内法の変更はTPPが発効しなくてもやる」と答弁をしています。TPP法案を批准する目的はまさにこれなのです。

外国（主に米国）のグローバル企業からすれば、自分たちがTPPを批准しなくても、日本を批准させるだけでうまみがあるのです。日本は国内保護の数々の規制をはずされ、完全に無防備のノーガードとなり、グローバル企業は自分の保護を維持したまま日本を、一方的に食い荒らすことができることとなります。その手段として使われるのが国家戦略特区です。その後には全国が食い荒らされることになっていくのです。とくに大阪は戦略特区に指定されていますので、全国に先駆けて混合医療の導入

や、病院の株式会社経営の許可など次々に規制がはずされていくことになる可能性が大了。

またさらに米国トランプ次期大統領は、TPPからは離脱するが、二国間の貿易協定を行うという事は否定していません。日米二国間の貿易協定(日米FTA)を要求してくることが予想されます。このときにわが国がTPPを批准していれば(これはほとんど確実な情勢ですが)、このTPPの条件をスタートラインとして、さらに強く日本に対して大きな譲歩を要求してくることになるのは必至です。

むしろそこにはTPPで最大の問題点であったISDS条項(これについては前号などこの記事を参照)が含まれているのです。こんな二国間FTAが締結されてしまうことになれば、それこそ日本国民を貧困と悲惨へ陥れることになってしまふことは避けられないのです。そんな悲惨な状態になっているのがお隣の韓国なのです。

◆米国との二国間自由貿易協定を結んでいる韓国の惨状

実は韓国は米国と二国間FTAを、すでに締結しており、そこにはTPPと同様なISDS条項が盛り込まれています。

この韓国の国民の生活状態については、日本のマスコミが取り上げようとしないという実態があります。韓国の大統領の不正問題と抗議デモがマスコミで大きく取り上げることとは対照的に、その背景となっている一般の韓国民の生活実態について、日本のマスコミがほとんど紹介しないことに注目しましょう。

『TPP秘密交渉の正体』(竹書房新書)の中で山田正彦氏は韓国の実態について、次のように語っています。

米韓FTAでは、米国の自動車を入力させるために、韓国内の厳しかった排ガス基準がゆるめられ、環境基準を米国に合わせられてしまった。またさらに「ラチェット条項」というものも、韓国は受け入れさせられている。これは「二度決められたルール・基準はもとに戻せない」という規定で、例えば一旦排ガス基準がゆるめられたら、二度ともう厳しくすることができない、というものの。

韓国はこのFTAによって、自国の農業を切り捨てた。実際、七割の畜産業者が廃業をしている。また米も関税がゼロになる。韓国は自国の食糧を米国やオーストラリアなどからの安い輸入食品に頼ることにして、食糧自給を断念したのだ、と山田正彦氏は指摘しています。

これは韓国ばかりでなく、メキシコも北米自由貿易協定(NAFTA)で、自国の農業での自給を断念して、米国からの輸入に頼ることにしているのです。米国大統領選挙で、トランプ氏がメキシコ国境に壁を作るといって注目を集めたメキシコからの不法移民の問題は、このNAFTAによる農業破壊で生活が立ち行かなくなったメキシコの零細農民が、大量に米国に不法入国した結果として起こってきているのです。

また経済評論家・三橋貴明氏によると、韓国の経済状態は以下のようにだと指摘しています。韓国の大企業は外資に牛耳られて、自国民

のために動かず外資の株主のために動く。その結果、

- ・自国民の給与を徹底的に安くしたり、
- ・自国民に製品を海外より高い値段で売ったり
- ・海外の株主のために巨額な配当金を送ったり
- ・自国民が安い給料で必死になって稼いだお金が巨額の配当金として、外国人に貢ぎ物のように送られる
- ・大企業の法人税は安く(サムスンなどは特別に優遇もされている)稼いだお金は税金としても韓国に残らない

韓国経済は外国人投資家に牛耳られて、韓国人を安い給料で必死に働かせ、出した利益は国外に流れていってしまい自国民はちっとも豊かにならない。こんな構図になっている。

これは植民地とっていい。しかしこういった企業が韓国経済を支えているので、これだけ自国民を裏切っても、これらの企業なしでは韓国経済は成り立たない状態になっている。

格差の広がりを見る係数でジニ係数というものがあるが、韓国のジニ係数は〇・五三。これは暴動が起こるレベルで、その結果犯罪率があがり自殺率も毎年挙げられている。

自分の国に見切りをつけた若者はどんどん海外に流出していく。貧富の格差、福祉政策の悪さ、深刻な失業などの状態が続き、強盗は日本の二倍以上、暴行事件は三倍以上、殺人事件は五倍以上、強姦にいたっては四十倍以上になる。そのあまりの多さに韓国政府は二千八年から電子足輪の装着

を犯罪者に義務つけたが、犯罪は減っていない。などなど。

このようにも、一般の韓国民の生活実態は非常に苦しい状態に陥っているといえます。これは歴史的な条件などもあるでしょうが、米韓FTAの締結によって、いっそう深刻な状態に陥れられているといえそうです。また韓国の現状は、安倍政権がこのまま続いたときの近未来を映し出していると考えられるでしょう。

◆安倍政権のやっていること  
日本に目を向けて、改めて安倍政権がやっていることをざっと考えてみると、

- ・憲法の破壊・緊急事態条項など独裁的な内容への改憲を進める。立憲主義の無視。
- ・アベノミクスの破綻・いつまでもデフレ状態から抜け出せない。GDPも一向にあがらず二十年前と同じレベルに留まっている。それを姑息にごまかし続ける。
- ・国会軽視・強行採決を連発し、まともな議論をせず、暴言を吐き続ける。
- ・国民生活破壊・年金のカット、医療費負担増、福祉の切り捨てなど
- ・規制改革…と称して国内のセーフティネットを破壊していく。

・マスコミを恫喝して、政権批判を封じる。特にNHKニュースのコントロール。

- ・原発推進・原発再稼働、フクシマ原発事故処理の無責任体制、原発輸出大国を目指す、完全に破綻した「もんじゅ」の後継の高速炉開発などなど。
- ・沖縄辺野古基地の強圧的な手法。
- ・武器輸出…日本を死の商人の国に作り替える。

・ギャンブル国家・賭博を経済成長と称する廃類ぶり。

・日本国民の生活のあらゆる場面を差し出し、米国グローバル企業の儲けの場にしてしまう。その結果は国民の医療・福祉などのセーフティネットを破壊してしまう。国民の命と生活を危機に陥らせる。

・愚かなバラマキ外交・対米従属一辺倒で、自主的な外交といえるものはない。対ロシアでも全く成果なし。

このような所行を続ける安倍政権とは、誰のための政府なのかと考えると、これはもう明らかです。つまり国民の大多数のための政治ではなく、米日の巨大企業の儲けをわが国の国民からかすめ取る手先と化しているということでしょう。このような安倍政権を支持するという人は何らかの形で、このような所行から利益をえられると考える人々なのだろうと思います。その実数は多くはないはず。

ではなぜ、マスコミで報道される世論調査での政権の支持率が下がらないのか、という疑問が湧いてきます。この問題はまた別の機会にしたいと思いますが、一つには世論調査の「いかかわしさ」があります。一般に調査は電話で行われるのですが、その調査の仕方の問題が大きいといえます。最初に政権を支持するかを聞いて、反対であればすぐに電話を切るという実態が報告されているのです。その他にも集計が正しい保証もないことも考える必要があります。

◆提案「改憲勢力で三分の二阻止の野党共闘」

安倍政権は誰のためのものなのか。少なくとも九九%の国民のためでないことは、この秋の上なくはつきりしたように思いえます。

このように日本国民の命と生活を破壊し続ける安倍政権を一刻も早く権力の座から引きずりおとすことが、何にもまして最も必要なことです。

そのために、私たちにできることは何なのか。私たち個々の力ではすぐにそれをすることはできない話ですが、何もできないわけではない。歯がゆいながらも、私たちの意思を表すのは国政選挙に他なりません。次の国政選挙といわれているのは、衆議院選挙で、場合によっては、年末の衆院解散、年明け投票という筋書きも、ささやかれているといえます。

この衆院選挙に向けて一番大切なことは何でしょうか。衆院が改憲勢力で三分の二となることを阻止することが最重要と思われれます。安倍政権は憲法審議会を作って改憲の準備作業を着々と続けています。改憲を許してしまつと、この記事でもたびたび取り上げてきたように、人権も言論の自由も制限が可能になる「緊急事態条項」を憲法に組み込み、その結果政府にほとんどの権限を集中させ、文字通りのナチスなみの独裁政治を可能にしてしまうこととなります。国民は言論の自由も、基本的人権も、奪い取られ、戦前の世界に逆戻りすることになってしまつのです。

一強と言われる安倍政権にこの改憲を許さないためには、まず、野党共闘で改憲を許さない勢力を三分の一確保して、改憲を不可能にすることを最大の目標にして

戦う必要があるのです。野党共闘で「連合政府確立」を訴えるのは今の段階の目標ではないし、必ずしも国民の多くがそれを望んでいるわけではありません。

しかし安倍政権の独裁と戦争への暴走を止めなければならないのは、国民の多くが一致できる点のほうです。この切実な一致点で、野党共闘を組み、衆議院の三分の一を「改憲を許さない勢力」で占めることが最重要課題になるものと思われれます。

ぜひそのような実現可能な形で野党共闘を組み、選挙協力を戦えば、安倍政権の憲法改定の策動を阻止することが可能で、それによって次の課題が開けてくるものと考えます。

逆に、改憲勢力が三分の二をこのまま占め続けさせ、改憲発議を許せば、国民投票もマスコミ操作によって通つてしまう可能性が高まり、「緊急事態条項」を盛り込んだ憲法が成立してしまつ、という事態になりかねません。そうなれば「緊急事態」は（ナチスがそうであったように）延々と引き延ばされ、独裁政権が成立して、人権無視、言論弾圧、拷問、戦争への歴史が繰り返されることになってしまつのです。

【付記】ネット署名サイトにて「反安倍・改憲阻止の統一候補ファンクラブ」というものを開設しております。ネット検索でアクセスして頂き、賛同をいただければ幸いです。

## 医療何でも相談室 (1)

伊藤 明 (精神科医)

### 読者からの医療相談

健康診断などでは、血圧が上一五〇台、下が八〇台で微妙ですねと言われるながら、薬を飲みたいくないので何もせずきた五〇代半ばの女性です。半年前に上が二〇〇台、下が一〇〇超えしてしまい動悸もすこく、さすがに怖くなり病院にいき高血圧の薬を飲み始めました。処方されたのはシルニジピン五ミリです。飲むのを時々忘れながら現在のは上が一三〇台、下が八〇台です。食事生活も気を付けていますし、ずい分改善されたと思います。

ネットでは高血圧の薬は飲んではいけないと書いてあります。飲むのを止めてはいけないでしょうか。(Sさんより)

### 《回答》

初回から、なかなか難しい問題が与えられました。慢性の病気の薬をいつまで続けていくか、また止めるとしたらどのようによめていくのか、ということとは、医者も頭を悩ませる問題です。

Sさんの飲まれている薬は、カルシウム拮抗剤に分類される、比較的作用のおだやかな薬で、量としても少量といえます。現在血圧は上が一三〇台、下が八〇台ということで、これで上手くコントロールされているようです。

また食生活を改善され、恐らく薄味の食事にして塩分制限をされたり、運動などで減量をされたりされているのだと思いますが、生活習慣病全般に言えることですが、食生活を見直して、定期的に適度な運動を

心がけることによって病気は改善されるもので、それが薬よりも重要な意味をもつことが多いものです。

しかしある程度症状が強くなつてくると、薬は必須になってくることも多いのも事実です。高血圧の場合には、近年ガイドラインの基準が厳しくなっています。というのでも高い血圧を放置すると、脳卒中や心臓発作、心不全などの重大な疾患のリスクが高くなるのが明らかになってきていくというの理由です。逆に収縮期血圧が一〇下がるとこういったリスクが有意に下がるかと報告されています。

医者立場からすれば、Sさんの血圧は作用の緩やかとされる薬を少量飲んでコントロールされているようなので、続けられるのがいいかと思いますが、Sさんが薬を止めていきたいという希望が強いようなら、やはりその意思を主治医の先生に正直に相談をされることをお勧めします。(ネットの情報の価値は千差万別で、すぐに信用されるのは危険だと思います)

また、血圧は一日のうちでも変動が大きいものですので、いろいろな時間帯、状況で計ってみて、大幅に上昇することがないかを一度チェックされることもお勧めします。

尚このカルシウム拮抗剤はグレープフルーツやそのジュースを飲むと効果が強まることもあるので、ひかえるようにしてください。(みかんやオレンジは大丈夫です)。

なお、詳しく知りたい方はウェブで「国立循環器研究センター循環器病情報サービス」のページで「病気について」、「高血圧」の記事がおすすりめです。

## ◆平和をつくりだす人たちは幸いである

先日、NHKの衛星放送で映画『ベン・ハー』を観た(ウィリアム・ワイラー監督、一九五九年、アメリカ)。そのとき出合ったのが標記の言葉である。この言葉はマタイによる福音書には、『幸いだ、平和を造り出す者たち、その彼らこそ、神の子らと呼ばれるであろう』とある(新約聖書翻訳委員会(佐藤研)訳、『新約聖書Ⅰ』、岩波書店、一〇六頁)。また映画には、ルカによる福音書の言葉も出てきた。『父よ、彼らを赦して下さい。彼らは自分が何をしているか、わかっていないからです』と(新約聖書翻訳委員会(佐藤研・荒井献)訳、『新約聖書Ⅱ』、岩波書店、一四三頁)。キリストが十字架にかけられ処刑される前の言葉であった。

さて、高浜虚子に、  
去年今年貫く棒の如きもの

という俳句がある。一年が終わり、また新しい一年が始まるうとしている今、先に紹介した聖書の言葉を考えてみたい。虚子の言う『貫く棒の如きもの』が少しは見えてくるかもしれないと思うからである。

## ○第一の言葉について

日本と大陸(朝鮮半島と中国など)との交流の歴史は二千年を越えるだろう。倭寇による海賊的行為や元寇、秀吉の朝鮮侵略などもあったが、二千年の全体を通じて、

交流は信義に基づく友好的なものであった(と思う)。日本は大陸の先進文化を取り入れ、吸収し、日本的なものにして日本の文化を豊かにした。大陸は、日本にとって、尊敬し学ぶべき先生であった。その大陸が近くて遠い存在になったのは、大陸側の行為によってではなく、日本側の行為によつてである。せいぜいこの百年余にわたり日本が引き起こした憎悪の歴史のせいである。

## 百年の憎悪が一衣帯水の

## 友好と信義を根こそぎにする

## 友好と信義の歴史二千年

## 憎悪百年遠き隣国

そういう背景があつて日本と大陸の政治的対立は、今現在を含めて、戦後何度も何度も顕在化した。発端はいつでも日本の政治のあり方に関わり、たとえば政治の中枢にいる者たちによる靖国参拝問題や、歴史認識に関わる失言などであつた。失言と言うが、それはもちろん幾多の政治家にとつて本音であるから繰り返される。歴史認識に関わる日本の政治の歪んだあり方が大陸の反日感情を激しくかきたてるのである。そのたびに、政治と経済は違つ、政治と経済は区別して関係の修復を、などと言われたが、日本が大陸と正面から向き合い、歴史を直視し、友好と信義の歴史を回復する立場に立たなければ問題は解決しないだろう。交流は、政治・経済・文化のいずれの分野においても、友好と信義に基かなければ深いものにはならない。

日本の政治のあり方は、根本的には、日本の国民の政治的選択の反映である。日本国民の多くが、『幸いである』という『平和をつくりだす人たち』にならなければ、日本の政治のあり方は変わらない。日本国民に問われているものは重い。

## ○第二の言葉について

『かけつけ警護』など、安保法制(戦争法)によつて新しい任務を付与された自衛隊の部隊が南スーダンに派遣された。自衛隊は国連PKO活動の一翼を担う。南スーダンにおける国連PKOの活動は停戦の監視などではなく、武力行使を伴う紛争当事者そのものになる活動になっている。憲法九条のもとで、自衛隊は、海外で、武力の行使を伴う『かけつけ警護』などの活動ができるのか。私には大いに疑問である。戦争法を推進する者たちは、憲法に違反しないと云う。戦争法そのものが憲法違反ではなく、『かけつけ警護』は戦争法に基づくものだから、か。『彼らは自分が何をしているか、わかっていないから』であつたとしても、私は彼らを許さない。わかっていないなら、その無知は、その不勉強は非難されるべきである。わかつていて憲法違反ではないと強弁しているのなら、その政治的傲慢は何をもつてしても許されるものではない。

日本の未来は、道半ばと総理自らが言わざるを得ないアベノミクスの道が終点まで行けるかどうかや、トランプ新大統領下の米國を何とか引き入れてTPPが無事に発効するかどうか、あるいは二度目の東

京オリピックが成功するかどうかなどにかかつていない。多くの国民が、憲法九条の精神をわが精神とし、平和をつくりだす人たちであるかどうかにかかつている。

九条があれば平和もありふれる

この国の未来はそういうものであつてほしい、と私は思う。

ここまで筆を進めて来て、私はふと、あれはいつ頃のことか、あるいは夢なのか現なのか、校長として中学生たちに『平和をつくりだす人たちは幸いである』と話をしたことを思い出した。新年、三学期の始業式のことであつたような……

いい機会です、読者のみなさん、中学生に戻つたつもりで聞いてください。こんな話ですが……

『皆さん、新年おめでとございませう。新しい年が明け、三学期が始まりました。三学期は、二ヶ月と少しの期間しかありません。しかし、それは、誰もが今年度を立て派に締めくくり、それぞれの春に向かって大きく飛躍するための準備をやり遂げるのに、決して足りない時間ではありません。ただし、そうするためには、前にも紹介した加藤周一氏の言葉のように、

『一日の中に永遠をみなければ、永遠はどこにもない』

それくらい気構えと覚悟で、皆さんは日々の課題に立ち向かわなければならぬ。季節の春は、この冬を抜けて、やがて必ず来ます。その春に、皆さんが自分自身

の新しい春を重ねてくれることを期待します。もう少し話を続けますので、皆さん、座つて聞いてください。

(「えー」という中学生たちの声)

さて、そのように心から期待しながらも、目を世界に向けると、二十一世紀に入つてもう何年にもなるといふのに、世の中は明るいニュースばかりに包まれていく訳ではありません。むしろ、その逆で、私たちが住むアジアに限つても、パレスチナ問題、イラクの大量破壊兵器査察問題、北朝鮮の核開発疑惑問題など、現在の世界情勢の下では新たな戦争につながりかねない大きな問題が世界の焦点になっていきます。

(私がこの話をしたとき、イラク戦争はまだ起こつていなかったようだ。その後、米国を頭とする有志連合はイラクに「軍事進攻」した。周知のとおり、戦とテロが世界各地で連鎖する時代へと世界の歴史は幕をあげた)

イエス・キリストの言葉に、

『平和をつくりだす人たちは幸いである』

というのがあるそうです。私はキリスト教徒ではありませんが、いまこいう言葉を讀むと、最大の暴力である戦争を、人類は、本当に、どうすれば永久に克服することができるかと、考えてしまいます。もちろん、考えて答えが見つかるという単純な問題ではありません。しかし、私たちにとつて、答えがなくても考えない訳にはいかない問題があるのも事実です。しかも、一般論として大きな問題であるというのではなく、思いもかけないところで、深く、私た

ち自身の人生に関わつていたりする問題です。そういうことに関係があるだろうと思ふ幾つかのことを、今日は話します。

戦前の哲学者、三木 清は、その著書『人生論ノート』(新潮文庫)の中に『怒について』という一章を起し、こんなことを書いています。

『神の怒はいつ現はれるのであるか、正義の蹂躪された時である。怒の神は正義の神である。』

神の怒はいかに現はれるのであるか、一変地異においてであるか、予言者の怒においてであるか、それとも大衆の怒においてであるか。神の怒を思へ！……

(このあとが、すごいと思ひました。殺し文句です)

今日、愛については誰も語つてゐる。誰が怒について真剣に語らうとするのであるか。怒の意味を忘れてただ愛についてのみ語るといふことは今日の人間が無性格であるといふことのしるしである。

切に義人を思ふ。義人とは何か、一怒ることを知れる者である』

答えはありませんが、いろいろなことを深く考えさせられる文章です。三木 清がこれを書いたのは、日本が大陸で戦争をしてきた昭和十四年です。やがて彼は獄中につながられ、敗戦の翌月、昭和二十年九月に、ついに解放されることなく獄死しました。問われた罪は治安維持法違反、彼の獄死により治安維持法はようやく廃止されることになりました。

(三木 清の怒りを念頭においてではないだろうが、こんな歌が詠まれているのを

最近知つた。

統べらるることに馴らされ怒らざる

民住む国となりぬ日本は

歌の作者は、以前本稿で紹介したことがある渡辺幸一氏である)

また、すでに亡くなりましたが、一橋大学に高島善哉という盲目の学者がいました。『自ら墓標を建つ・私の人生論ノート』(秋山書房、一九八四年)という著書の序文『私の学問観』にこう書いています。

『学問への道は真実一路への道であり、美しいもの、良いもの、真なるものへの感受性だ。しかし、……学問はただ学問のためにあるのだろうか。真理はただ真理愛によつてだけ会得されるものであろうか』

人間が学ぶことについての重要な問いかけを行っているここにも、必ずしも答えはありません。答えに至らなくても、大事な問題は自分で考えなければならぬということなのでしょう。

私は、なぜこんなことを話しているのか。そろそろ、その訳を言わなければなりません。

私たちが学ぶことは、何か。簡単に言えば、私たちが以前の人間が、自分たちが生きてきた自然をどのように認識してきたかという自然理解に関すること、そして、人間が創りだし発展させてきた社会と文化のこと、さらに、そういうことをしてきた人間自身のこと、それだけです。言つてみれば、私たちは、人類発展の歴史の総体とも言ふべき、人類が獲得した文化を学んでいます。そして、何かを学べば、その表現

方法や内容は人それぞれに違いますが、私たちは新たな文化の伝承者となります。

文化伝承の表現方法や内容は人それぞれに違う—それが人間の個性です。人間の個性とは、やさしいとか強いとか、しっかりとっているとかええかげんとか、そんな類の単なる人間の性格をいうのではありません。

さて、閑話休題。文化伝承の過程は、文化の新たな創造と発展の過程です。どんなに小さくても、私たちの人生は、この文化の創造発展過程の一部を成している。いま皆さんがここで学び獲得している力は、未だその自覚などなくてもかまわないけれど、やがて時が至れば、必ずや皆さん自身に大きなブレイクスルーをもたらしてくれる力になると信じます。そのとき、皆さんのその力が、皆さんが生きる同時代の人間の文化を創り、支えるのです。点にも満たない短い時間の人生を生きる人間は、自らの点を人類の長い、永遠の歴史的発展過程の中に位置づけるのです。

それでは、文化とは何か。広辞苑によれば、cultureとしての文化は、『③人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果』であり、『衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む』ものです。

『文化は人が創るので多様であり、地域依存的である。…文化には先ず、基礎になる学問がなければならぬ。一二〇〇年に互って高水準の学術を保ち得た都市は少ない。次にその間休みなく文化の創造が続かなければならない。そして創られた文化は誇りをもって継承保存されねばならず、

戦乱災害などによって散逸してはならない。このように考えると、アテネ、ポンペイ、洛陽などはなくなってしまったしニューヨーク、東京などは若すぎる。京都文化こそは長年高い学問水準に支えられ、その間休むことなく創造された文化が余すところなく保持継承されてきたバリの文化と並ぶ希な優れた存在なのである』

（藤永太郎、『海洋化学研究』一五巻一  
号巻頭言、二〇〇二年）。

千年を越えて文化が継承保存されてきた都市は、京都かパリか、世界に指折り数えるほどにもないことに驚きました。文化の継承保存を妨げた最大の要因は、幾多の戦乱であり、戦争です。そう考えると、戦争と平和の問題は、人間が創る文化そのものの問題であり、つまりは、人間が生きること、学ぶことの問題であるのです。

そして、改めて思いました。『われら新しき文化創らん』『われら未来の平和に生さん』と詠う私たちの校歌には、これらの問題について並々ならぬ決意が込められている。私たちは、その深い意味を知り、誇りにしたいと思います。

皆さん、元気に、いい三学期を過ごしましょう』

よもだな素老人が、えらいまじめな話をしたものだと思っ。

さて、『芥川だより』もいよいよ本年の最終号を迎えた。さあ、ここで素老人から読者のみなさんへ、本年の最終号を記念して宿題を出すぞ。

### 【宿題】

よその国のことではなく、日本の政治の

あり方に関する問題である。

つい先頃、日本は、核兵器禁止条約の締結を求める国連決議に反対票を投じた。理由は、「核保有国と核を持たない国との対立をおおるものだから」（岸田外相発言要旨）とのこと。投票に先立ち米国は、日本をはじめとする同盟国、友好国に対し、この決議に反対するように根回しをしていた。所詮、オバマ大統領の言う『核なき世界』や広島訪問も、米国にとってその程度のこと過ぎなかった、と言える。こうした経緯に関わらず、国連の委員会は先の決議を圧倒的多数で可決、総会に諮ることとなった。私はつくづく思った。

被爆国核なき世界遠ざける

そしてまた、二〇一一年三月、東日本大震災があり、世界に冠たる科学技術立国の日本において福島第一原子力発電所の過酷事故があったとき、私は啞然とし、呆然とし、ふり返って何という国かと思った。

スリーマイル、チェルノブイリの事故ありてフクシマはあり被爆せし国

さて、このように、被爆国が核抑止力に固執すること、また、福島第一原発の過酷事故を経験してなお原発再稼働に突き進む国であること、これら二つのことについて政治のあり方として共通性があるか。あるとすればどのような共通性であるか、思うところを述べよ。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

### 哲学者のつづき (29)

#### ドイツ哲学の旅へ 精神世界編(1)

祖蔵 哲

さて、七月二〇日の夜、私たちはドイツ南部メスキルヒで二〇世紀ドイツ哲学者最大の哲学者といわれているハイデガーの原点を辿った。偶然にもハイデガーの弟子というべきか元哲学教授にガイドしてもらったおかげで、英語を聞き取るのとその難解な哲学の説明を理解するのに相当神経をすり減らし疲れ果ててしまった。その夜は、ホテルのレストランで食事をしてすぐに寝ようということになったのだが、メンバーの一人の酒好きのIさんが一人このレストランに残って、先ほど見つけた明日のバスの運転手と意気投合して遅くまで飲んでいたらしい。ドイツ人のその運転手は女性であった。年齢は四〇歳前後。日焼けしてそんなに大きな体格ではなかったがたくましい。私はいくと、やはり疲れ果てているので先に部屋に戻ってすぐに寝た。いくら私たちはおじさん達とはいえ、男と女、どうなることやらと楽しみもあったが疲れの方が勝っていた。

あくる日、早速、Iさんに報告を聞きだそうとすると、あちらから大変だったと切り出した。昨晚、遅くまで一緒に飲んでいると急に彼女の方から、この町でハイデガーの取っておきの場所があるから今から行こうと誘ってきたという。さあ、といって手を取り、バスのキーをもって出よう

したと言う。私はこれにはびっくり。夜中である、飲酒である、男と女だけ。危険の極限ではないか。あせって聞き返した。どうなったの。Iさんは必死で逃げたという。当然ですよね。恐ろしい。読者の皆さんならどうしますか？

こんな、秘密のハプニングがあったが、何もなかったかのように女性運転士はグーテンモルゲン。これから私たちは貸切バスでいったん南下しボーデン湖を見学してから、今回の最終目的地、ドイツの禅寺に行くことになっている。前回にも話をしたが、哲学会の友人の紹介である。朝食はこのレストランで済ませて、私たちはバスに乗り込んだ。バスはマイクロバスで一五〜六人くらい乗れるので全七名の我々には余裕である。メスキルヒを出る前に、ハイデガーが散歩をよくしたという、野の道に寄った。哲学者らしく思索の道である。京都の銀閣寺近くにある西田幾多郎ゆかりの、哲学の道、もここから来たのである。私たちもしばらく歩きまわり、俄か哲学者になった。田園地帯が広がり、遠くに教会の屋根が見える。そしてこのあたりの風習か、道が十字に交わっているところには木製で十字架のキリスト像が掲げられている。やはり歴史的宗教だ。ドイツはルーターに見られるようにプロテスタントが主流であるが、ここ南部ではまだカソリックの影響が残っていると思われる。ゆつくりと哲学気分の浸ったところで出発。さてどうも、かの女運転手は昨晚、ここへ誘ったのか。よからぬ妄想が離れない。

その女運転手であるが、相当な豪気である。やはり女ひとり、バス運転という男職業界で生き抜くためには、柔では勤まらない。予定のコースではコンスタントへまず行く計画であったが、勝手に変更してしまつた。彼女いわく、面白くない町だとか。そんなことないだろ、一五世紀はじめコンスタンツ公会議はカソリックの分裂を再統一し、フスを異端者としたりした当地であるのに。強引に押し切られ、リンダウへ。アルプス地方ではレマン湖に次ぐ大きなボーデン湖はスイス、オーストリア、ドイツの三国の国境にあります。その湖の東にあるのがリンダウという町。町といっても橋がかかっている島である。鉄道も通じており観光地である。私たちもバスを降りて湖の辺に行き遠くにアルプスの山々をみた。スイスカな。国境が近そうだ。湖が眺められるレストランで昼食を済ませて、またバスにのり今度は北東へ向かった。ドイツの禅寺はアウグスブルグの近郊にある。アウグスブルグからさらに西にはミュンヘンがある。二時間くらいでバスは田舎町ディングケルシェルベンに入ってきた。ここで私たちは白隠会という禅のセミナーに参加するのだが、件のIさんは我々とは分かれてミュンヘンに行き、そこを經由でオーストリアのザルツブルグに行くとか。彼はモーツアルト好きでありのかの地は生地であるが、禅修業が嫌なのかどうかはわからない。でも驚くことにIさんはほとんど英語がしゃべれない。ドイツ語はもちろん少々心配だが希望なので仕方がない。ここ

で私は、後で揉め事になるのだが、女運転手に話して、ミュンヘンまで彼を送っていつてくれと頼んだ。バスの会社がミュンヘンの近くで今日はそこへ戻ると聞いていたからだ。ドイツ語は苦手なので英語で話すと、彼女はやわら会社で電話して、十五ユーロ払うなら送ると言った。さすがにしっかりとっている。日本人ならついだから只でということだ。まあ、安いとおもつてOKした。これが後ほど大事になるとはおもつてもみなかった。私の聞き間違いである。ここで二人とお別れ。でも昨夜のこともあり、この後どうなることや、いらぬ心配をしつつバイバイをした。

さて、禅寺はこの町のはずれにある。もともと日本に禅修業に来ていたドイツ人の男性が国に帰り日本人の奥さんとこの町で禅修業のための寺を建てた。もちろんドイツはキリスト教の国。なんでドイツ人が仏教と思われるが個人的な理由以外にも様々な精神的な問題があるのである。私達は早速この夫婦に出迎えられる寺に入った。寺といってもそこはドイツにある寺。日本式の瓦葺ではなく普通の様式三階建て。敷地は三〇mくらいで広い庭がある。外見は少しチベット仏教風の感じである。家は二段ベッドが三つ程あるゲストルームが三部屋。二階が食堂兼リビングと夫婦の居住区、三階が修行道場になっている。我々六名は男女分かれて部屋に入りひとまず休憩した。夕食の時間になったので三階に上がった。さすが禅寺である、食事は質素。パンとスープとミルクくらいのも。

食事の前には仏教式のお祈りがあつた。そしてこれからのスケジューリングが話された。五時起床、五時二十五分座禅・清掃、七時朝粥、八時華道、十時座禅、十二時昼食、十三時作務、十六時華道、十八時夕食、十九時座禅、二十一時夜禅。これが明日から二日間、ハードです。今日は私たち日本人だけがあすからはドイツ人も参加するのだとか。修行は不安だが、交流は楽しいのだ。今日はまだ修行にはいっていないのでリラックスして奥様の話を聞いた。

ここにお寺をつくった動機は複雑であつた。まずドイツ人のご主人、つまり現在この寺の住職はドイツのある企業で働いていたのだが精神的な悩みから仏教に興味をもつたらしい。そのころミュンヘンに留学していた現在の奥さんと知り合つたのだとか。日本へ来て禅寺で修行してここに戻り寺を建てようとしたのだが、それにもいづらかの困難があつたという。まず、近隣の住民の抵抗である。二〇年ほど前の当時でも、やはりわけのわからない宗教施設が近くできるということは住民にとつて不安の種になる。何回も役場に説明しやうと理解してもらい建設ができたという。それからは住民との信頼関係も良好で何のトラブルもないとのこと。しかし、最近の移民流入問題やイスラム教排斥の流れはとても不安になるとのこと。異質のものを排除しようという最近の世の中の風潮は異邦人にはとても敏感に感じ取れるのである。それから奥様は様々な苦勞話を我々に語られた。想像するが、女一人、い

くら且那樣がいるとて日本人ひとり、その想像すら超えるものが沢山あったのである。さすがに微妙な日本をとなるとドイツ人のご主人、住職は理解できないらしい。しかし気持ちにはわかつていたのであろう。しかし、強い女性である。そんな話でこの日は過ぎた。

さて次の日二十二日から本格的修行の開始だ。朝早く起きて、修行道場へ行くともう今日から参加のドイツ人たちが座禅をしていた。本場の日本人が遅れている、少し恥ずかしさを感じたが、二〇分間座った。この日のために少しづつ座禅の練習をしてきた。なにせドイツへ来て、なんだ日本人たいしたことないと言われないためだ。しかしやはり足が痛いしつらい。座禅が終わってもすぐに立てない。恥ずかしい。ドイツ人たちはすつと立って立業に入る。かなり座禅をしている人達なのだろう。また、座る。二回繰り返し終了。二階に降りて朝の食事。ここでまた失態。食事中は沈黙、修行中だから。忘れていた。日本人ダメね。食事が終わり、話はオーケー。ここで初めて自己紹介に。ドイツ人は男性一名女性二名。いずれも年配の方だ。男性はこの禅寺の会長とのこと。いずれももう十年以上定期的にここで修行をしているのだとか。この寺は基本的にこういつた禅修行のプログラム、セミナーを定期で実施しておりその参加者の参加料で維持している。現在会員がほぼ六〇人くらいで運営されているらしい。今回は珍しく日本からグループがくるといふことで会長の参加が

あったようだ。入会の動機は様々であるが共通するのはやはり心の、精神的な問題。キリスト教があるのになぜ仏教をと思う。

しかし、現在、日本も同じであるが、人々の宗教離れが進んでいるという。キリスト教徒でもほとんど教会には行かない。それは宗教的な問題がなくなったのかというところではない。世界中でこういう現象は起きている。人間の悩みが多様化しているのだろうか。それに宗教の側がついていけないのか。問題の多様化の点ではそうとも言えるが、でも悩みは共通している。仕事、人生、対人関係その意味がわからなくなっていくというような、「意味」を理解できない、感じ取れないという現象である。この「意味」を「理解」すること、「感じる」ことは大きくことなる。私たち、現代人、いや『自己』という存在をはじめ「意識」した近代的人間の特徴でもある。

近代哲学の創始者とされるデカルトは『我考える故に我あり』と言いました。『感じる』ではありませんよね。「感性」つまり感じることも、理「解」つまり頭で考えたこと優位とし逆転したのはそう遠くない昔のことである。『まあ、そんなに感情的にならないで』と言うのは「理解」すなわち「知性」優位の世界です。「感性」「感情」というのは何やら『自然的』それに対し「理解」「知性」というのはなにやら『人間的』なものと考えられる。この理屈でいくと近代は『人間』が『自然』よりも上になっている。そう、そのとおりですよ。科学技術の発達によって、人間は自

然を支配できると考えていますよね。特に西欧思想はそうですよ。なぜこうなっているのか。西欧ヨーロッパがもともと自分とは異質の宗教キリスト教を無理に取り込んだからですかね。つまり神にかわって人間は自然を支配するものとして選ばれた、というもの。罰を受けたものの知恵の果実を食べたのは人間だけです。その後、神の作った自然を知ることが神に近づくこととされたのです。だから西欧にのみ科学が発展したと考える人も多くいます。

これに対してインド発祥の仏教は『感じる』こと優先。しかし、その『感じる』こと自体も否定するという超人間、超自然的な宗教なのです。ここが、西欧的価値観に疑問を持つてきた世界中の人々が仏教特に禅に惹きつけられる要因になっているようです。禅といえば現代は再び「ZEN」ブームらしいのです。アメリカでは「マインドフルネス」といって禅の瞑想法を取り入れたセミナーが大流行。グループやアップルなどの大企業が会社をあげて社員トレーニングさせているらしいです。うーむ、これはこれで考えものですね。なにか会社が社員をこき使うための道具にしているみたいで。本来の仏教思想とは違うのではとも思います。それと似たようなものが、このドイツの禅寺でおきていると言いたくありませんが、どうもうまく状況を言い表せません。

朝食を終えると、少し休憩して庭掃除。広い庭なので掃除のしがいがあります。仏

教では掃除も作務といって修行の一つ、いい加減にはできません。修行ですから、もちろん無言です。さて、作務も終わると今度は生花。なんで生花かわかりませんが、考えてみれば、華道も禅修行の一つかも。奥様がとある華道の教授とかでセミナーでは必ず入れているのだとか。それで私たちは、その生花につかう草花を山に採りに行くことになったのです。これがここでのやり方とか。ドイツの田舎まできて山へ芝刈りならぬ、草花採りに行くとは思いませんでした。寺の前の道を少し登れば、そこはもう山の中、けれどどの草花をとればいいのか全然わかりません。するとドイツの参加者が丁寧に教えてくれました。さすが先輩。持つて帰って早速、生けます。こんなの簡単だ、我ながらよく出来たと思つて自分の見とれていると、教授の奥様がここはこう、ここはダメと言つて勝手にどんどんと切つたり折つたりしてくる。終いには自分の生けたのと全然違うものになつていった。で完成品は展示しましょうということになり、なんだか割り切れない気持ちでした。でも奥さんのこの自信、底力を感じました。お花が終わり、昼食を済ませると、夜までフリータイム。ここで夫婦が親切にもアウグスブルク観光に連れて行ってくれることに。ドイツの参加者も一緒に車を出してくださり、三〇分くらい東に走りそこへ着いた。

アウグスブルクはローマ皇帝アウグストゥスにちなんでつくられたドイツでも古い都市のひとつでフッガー家が有名で

金都市としても有名でした。モーツァルトのお父さんの生まれたところでもあるらしく何故か市役所でチョコレート売っていました。宗教の接点でもあり、プロテスタント、カソリックの教会がそれぞれの特色を競っていました。二、三時間街歩き回り、またお寺に戻った。

夕食時にはメンバーが一人増えていました。ご夫婦の子供さん、といつてももう二〇代後半の女性が参加。ミュンヘンで暮らしていてそこで仕事をしているのだが、日本から我々が来ているということに会いにきたと言う。明るい女性であり、日本語が話せ、しかも関西弁である。聞くと、奥様が決心して日本語で育てようと思死で赤ちゃんときから話しかけたのだとか。もちろんドイツ語はネイティブである。これは正解だなと感じた。日本語で話す何故か気持ちまで伝わる。外国語同士や、ましてや通訳を介してはどうも感情がうまく伝わらない。奥様が教えて日本語で育てられたのは日本人としての精神を教えるに日本語を通してしか出来ないと思直感されたのであろう。その通りだと思った。「言葉」は「考えていること」「概念」の全てを正確には表現できないが、「感情」としての表現も伝える力をもっていると思う。言葉は言葉でもある。夕食が終わると、また座禅の修行が待っている。眠くなるのをこらえて修行続行。ドイツ人からバカにされないように。無事お勤めが終わりやつと就寝。おやすみなさい。

さて、翌日二十三日も朝早くの座禅か

ら始まりました。そして朝食、作務。今日の昼食はアウグスブルク近くの中華レストランで禅料理をご馳走してくれるとか。なんで中華の禅とおもいましたが、もともと禅は中国から、納得でした。また、車に乗せてくれて二〇分くらい走り、ファミレスみたいな中華レストランに着きました。店にはいると中国人のお母さんが出てきて挨拶。この人もお寺のメンバーらしく、ドイツに住むようになって加わったのだとか。日本の精進料理とはまた全然異なるた禅料理をおいしく頂き、帰途に。夕食後の話もまた日本のことやら、ドイツのことに関して花が咲き、夜も更けていきました。いよいよ、明日は帰国日。長かったよう短いドイツの旅。観光、文化、音楽、哲学、宗教と様々な異国体験が出来た充実した旅でもありました。次回はいよいよお別れの号になります。それでも気になるのはここで一旦別れたIさん。娘さんの話ではミュンヘンでテロがあったそう。大丈夫か。



## 大峯奥駆道(7)

梵店主

よつちあんなは、何事に対しても「なんで？」という疑いを持つ性格なのだが、難病にかかってからは、病気に對しての疑問は封印した。考えれば考えるほど病魔の世界に引きずり込まれ負けてしまうと直感したのだ。わからない難病を素人がいくら考えてもろちが明かない、病気のことは棚上げしたのである。

しかし、何もせずにぼーっとしていたのではいけない、わからないなら自分の赴くままにいきやろうと決めた。

熊さんに六甲山を一緒に登って及第点をもらって正月の愛宕山へも無事登れたので、よつちあんなは少しばかり自信がわいてきた。独りで六甲山を歩いてみようと考えた。家内に相談したら「まあ、六甲山なら途中で倒れていても誰かがみつつけてくれるだろうから。ただ、独りで行くのは六甲だけよ。他の山は誰かが一緒にいってくれないとダメ」という。

それで娘や友人たちを誘い七人ばかりで阪急芦屋川から六甲最高峰に登り有馬温泉に下りる計画をたてた。コースタイムは四時間余りの初心者コースである。当日よつちあんなは、寒かったらいかんと思っ厚着してでかけた。昔、子供たちと登った道なので楽勝かと考えていたが現実はとても厳しいものだった。

歩き始めてすぐに汗が吹き出し足はス

ムーズに動かない。みんなが早く登る後をヒイヒイ言いながら汗だらけになって水ばかりを飲みながら、途中いくども引き返そうかと考えたがみんなの手前歩かなければいけないと思ひ必死で登った。八時間ほどかけてやつとの思いで夕暮れの有馬温泉に着いた。有馬では友人のおごりで温泉につかり退院祝いの宴会をもらった。

今度は、ひとりで同じコースを登ることにした。やはりしんどかったが時間は少し早くなった。それから毎週のように六甲へ通った。道になれてくると歩きやすくなる。暑い夏の日も登り続けた。水をいくら飲んでも足りないが、浴びるような汗をかき有馬の湯につかりバスで帰った。

六甲通いをしだしてから気づいた。身体の平衡感覚がよくなってきた。堤防を歩いているのに比べ、山道は歩きにくいので体のいろいろな筋肉を使う。目もしっかりと見ないとこけるので神経も使う。そのため次第にフラフラしていた体がマシになってきた。人の身体はうまくできていると思ひ出したのである。そんな想いが強くなってくると「六甲山が病を救ってくれる神」のよう思えて六甲山にすぎるような気持ちになった。薬より何より六甲山が、よつちあんなの守護神のように守ってくれると思えてきた。

山の途中で出会う老いた人を見ても「あの人たちも、もしかしたら私と同じような想いを持っているのかもしれない」などと

## チヨイぼけ街道はく進中…の巻

言葉は交わさないが勝手に想像するのである。難病という訳の分からない魔物に取りつかれたよっちゃんに頼れるものは自分の根性だけだと幾度も自分に言い聞かせた。よっちゃんには医者や薬のことはどうでもよくて己の気合で病と真剣勝負をしつづけてやろうと決心したのである。

しかし、ひと気のない山道を歩きながら「こんなに気張って歩いて本当に良くなるのかという思いが絶えず頭をよぎる。人間とは矛盾した思いで生きている。常に相反する思いにかられながら生きている。今、自分がしていることは本当に正しいのか、間違ったことをしているのではないか。よっちゃんも六甲山に登る元気があればもっと仕事のことを考えるべきだ、今やっっていることは現実逃避だけなんじゃないかと。何も体を動かすだけならジムに行けばいいじゃないか、などの疑念が頭の中に渦巻き葛藤の世界を漂流するが、歩くことだけはやめなかつた。

歩くことをやめればもう自分の頼るのが消えてしまいそうで怖くてやめられなかつた。学生時代に山岳部で登った山とはちがう山登りをしていたのである。山が遊びの対象から生きるための精神的な支えになっていたのである。六甲の山の神によっちゃんの人生を託そうと考えていた。

## チヨイぼけ街道はく進中…の巻

先月号で賞味期限切れのお菓子をもらったことを書いた、その続き。「一カ月も前に切れる！ ヒドイ！」と激怒していたのだが、あのお菓子（大きな缶入り）、結局一カ月かけて全部食べてしまった。最初は恐るおそる「傷んでいないにしても湿

気ているのでは？」とか「油がまわっちゃってるかも？」と疑いながら食べていたのだが、別に違和感なし。食べ終わるころには、賞味期限が切れてからゆうに二カ月は経っているのに、全然平気で、「捨てないでくれて、よかつた…」と感謝すると同時に「もうひと缶、あつたらもううけど…」という境地に達していた。人間というものはなかなか融通無碍である（融通無碍って、こんなときに使う言葉だったか？）。

正直に言うと、ゆうずうむげなんて言葉使ったことはない。もちろん、パソコンのワードで書いているから、書けるのであつて、手で書けと言われたら書けない。こんな難しい漢字だけではなくて、簡単そうな字も書けない。たとえば、「シヨウガ」。漢字だと生姜。読めるけど、いざ、何も見ないで書けと言われたら、「えええつと？」。脳梗塞もダメだ。さらっと読めるけど、「脳」以外は「こう？ 硬？ なんかわかんない」「そく？ さつぱりわからん！」。

これでも、一応、文章を書くという仕事

をしていて、ほかに収入の道はないという極めてシンプルな人生街道を歩んでいるのだ。せめて普通の漢字ぐらいは普通に書けないと飯の喰いあげだと思いが、ワープロ、パソコンと機械化が進む中で、漢字を書く能力が小学五年生ぐらいのレベルに落ちた。いや、なかには小三で習うような字まで、ひよつと書けなかつたりする。そして自分でぞつとする。「大丈夫か、ワタシ？」と思う。

以前、うちのねえちゃんが、どこかのカウスターで、「姉」と書こうとして、女偏まで書いたところで、私を振り返り、「アネってどう書くんやつた？」と聞いて、私をぞつとさせたことがある。「えつ？」と目を丸くする私に姉は軽く明るく「ド忘れやんか（笑）」と言い、私が書くと「ああ、そうそう」と何事もなかつたかのように、あとから話題にもしなかつた。計算力や貯蓄力（関係ないかしら？）において、妹をはるかに凌駕し、この世（自分の主人と息子一家など姉の周囲の世界）を牛耳っている姉が、姉という漢字をド忘れしただと？ 気の小さい妹は「ねえちゃん、何か脳に病気が隠れているのでは？」と一瞬心配したが、その後も姉は計算力と貯蓄力に磨きをかけ、この世を牛耳り続けているので多分大丈夫だったのだろう。

ま、そんなことをふと思ひ出すぐらい、見慣れた、書き慣れた漢字が書けない。そして、ぞぞつとする。

この間も、仕事先に郵便物を送るために

宛先を書いていた。「茅」という、一般的にはあまり使うことがない漢字ではあるが、私はその地名に宛てて、もう何十回も郵便物を出しているのに、茅場と書いたつもりで気がついたら「茅場」と書いていた。どこなん、茅場って？と自分で突っ込んでおいたが、本当にこんなで大丈夫なのだろうか。

友だちの多くは同年代なので、「ボケ」はしばしば話題になる。アレを忘れた、コレをしそこねた…。私と同じで若いころから、アレを忘れ、コレをしそこねて生きてきたくせに、最近の傾向のように「もう、ほんまに、どないしよう」とか言っている。だからといって、脳ドックに行くというような行動力はだれも持っていないので、脳トレ（トレーニンング）の情報交換なんかしている。

Y子さん（二歳上なので、敬称つきで呼んでいる）は「あのね、脳には7という数字がいいんだってね」と意気込んで教えてくれた。

脳にいいって、どういう意味？と聞いたら、それに対する明確な答えはなくて、「とにかく一〇〇から七を順番に引いていくと脳にいいんだって」。

それなら、テレビで見たことがある。アルツハイマーか認知症かの患者さんの検査でお医者さんが一〇〇から七を引いていく計算をさせていた。一〇〇・七は九三、九三・七は八六、八六・…と続けていくのだが、実は私はこれを見たときもぞ

つとした。どうしよう。私は計算が苦手、それでも一人で落ち着いてやれば少しはできるかもしれないが、人前で、しかもいいところ（正常なところというべきか）を見せようと焦ったりしたら、間違ひなくズタボロだ。「先生、すみません、計算、昔から苦手なんです」と訴えたところで、このテストだと私は必ず重度認定を受ける。と、まだ若いころに思っ「この計算が一般的な検査なら、今から練習して慣れておいた方がいいかもな」と本気で考えた覚えがある。もちろん、実行力がないから、一回の練習もしていないが。

だが、Y子さんは「友だちから毎日、お風呂で一〇〇から7を引く計算している、脳のいいトレニングになると聞いてから、私も湯ぶねにしゃがみ込んでやってみよう（Y子さんは広島出身で、大阪弁ではない）」と言っていた。

私にもすすめてくれている気配だったが、多分、私はやらない。だって、お風呂は私の数少ない憩いの場なのだ。そこで、頭がこんぐらがうような計算なんかしたくない。「ふうふう、気持ちいい！」とだけ思っ入っていたい。

と言いつつ、実は歯を磨いたり、瞑想したり、最近、いろいろ体にいいことをお風呂場でやっついで、これ以上、メニューを増やしたら、のぼせて倒れて死ぬという本末転倒な事態になりかねない。瞑想は、一六年の九月にNHKの健康番組「ガッテン！」で見たのだが、世界的に有名な企業

が取り入れているとかで、ストレスや認知症にいいという理由をわかりやすく説明して面白かった。もちろん、風呂場でやりましようとは全然言ってなかったが、一人で静かに瞑目するのに、温かいお風呂のなか以上にいい場所はない。お医者さんには反対されそうだが、大丈夫、一分ぐらいで飽きて浴槽から出てしまうので。目標は三分だが、そういう風に物事をきちんとやる人は風呂場以外の場所でもやりましよう。お金はかからないし、認知症だけではなくて、決断が早くなったりもするらしい。もともと私はまだ何の効果も実感できていないが。お風呂場というふやけた場所でも一分足らずでは効果を期待する方が無理か。ともあれ健康番組のおすすめ通りに生姜ココア（ここで、この漢字）を飲み、脳梗塞（ここでも！）予防にマカダミアナッツをかじっている私。チョイぼけ街道に光あれ！

(AO)



## 父のシベリア俘虜記

### 「流転八十年」(8)

若山 哲郎

前身に父が書いている、昭和一三年から昭和三年、約十年間の長い悪夢、とは一九三二年（昭和六年）の満州事変から一九三七年（同一二年）の後から自分が日本に帰ってきた年月のことを言います。その悪夢から醒めて帰ってきた故郷はどうなっていたのか？また日本はこれからどうなるのか。いよいよ、本俘虜記は最終となります。復興する日本とその後の世界はどうなるのか。父の私たちへの遺言でもあります。

### 『流転八十年』(本編より)

#### 故郷の崩壊

広島駅目指してたどり着く夕、疲れ切つてくたくた、毛布外套を駅の床上に敷くリュックを枕にしたままシベリアの夢を見たまま朝を迎えた。目を覚ますと、リュックも何も皆目一つのものもなく身ぐるみはがれて着のみ着のまま、包の中には除隊引き揚げの書類、舞鶴援護局からの支給の品の詰められたものも悉く無くなって、キップだけは求めて京都駅に帰りつくことが出来た。

母と再会したが、次男の英雄、三男の雅信は中国戦線で失ってしまった。私のような日本人は全国にざらで、親兄弟数百万の

罪のない老若男女、原子爆弾と国土盲爆の為、命も家も失い、日本全土が焼土と化して、全国の都市は悉く軍事施設ありと判断され盲つぶしに爆弾の火の海となった。僅かに京都市だけが残されたのだ。

戦争は国土を崩壊し、その被害は二代三代とその後遺症を残す。理由があるろうと日本が仕掛けた戦争、相手国の中国はもとより、東南アジアの諸国の民族にどのくらいの痛手を与えたことだろう。この戦争の最高責任者は日本側は誰なのか、アメリカを初めとする連合国側は結論を東条以下戦犯として二十数名にしぼったけれど、最高責任者は忘れてしまったのではないか。

アメリカの世界政策の意のまま、世界の国々の批判は無視のままである。またその下の海外での戦争犯罪で死刑となった将校、兵士は限りなく存在するのだ。

#### 家の復興

昭和二十二年私は日本の舞鶴港へ上陸復員した。故郷広島市に引き上げたけれど原子爆弾の壊滅の跡未だ復興のきざしもなかった。勿論、比治山西麓の私の住屋は跡形もなく新家屋が建ちかけて、親せき一族も皆無のありさま、止む無く京都市に引揚げて母や伯母三人と再会したが無一物でこの伯母たちも背負うようなはめにたち至った。私は結婚どころではない。高野のFさんという年配の方と知り合い、食うために東京・大森蒲田にあらやの二階をお借りして看板の絵など画き口を養い、赤

羽まで出かけてはさつまいもの買い出しなどして約一カ年足らず、食いつなぎはしたものの将来性も全く無い上に体が疲労のため半病人、仕方なく京都に又舞い戻ったのだ。

昭和二十三年中頃、京都の小学校に復帰したらどうかと知人らに奨められ、再び戦前の勤務校御室小学校に復職した。その当時ある人の紹介で妻と見合いをして結婚したけれど、実母と伯母三人の住む家族にはいり込む妻は最初から不幸と不条理の穴に埋れることになった。

### 移り行く情報 台湾にて

一九九〇年三月、私は台湾に来て初めての日、宿が無く台北師範大の寮に泊まったことがある。晚餐に集まった留学生はドイツ人、カナダ人、日本人数名の食卓談、たまたま現代の政治問題に移った際、学生の中からリクルートに関係のある中曽根の名前が出たり、関連のある代議士が再度当選しているなど若い学生などどうしているのかと憤激した意見も出ていた。

ドイツの壁が破れて、東ドイツからどつと西へ入った人々は莫大な数、失業問題や物価問題が頻発していたが、僕たちドイツ人はこんな時こそ真実のために力をフルに使い生活と団結のため不平なんか言うドイツ人はいないと話した。又ドイツ人と日本人の戦争反省のあり方は異質的差異さえ感じられた。歴代首相が靖国神社に参拝するなど、又戦争のことなど台風一過

さらりと忘れ去る日本人のこともだ。

天安門前広場事件の背後にアメリカが踊っているこの記事が三月十九日の台湾大新聞に、又その日のテレビ放送に、敵はアメリカだとのトップニュース。二カ月の長期間沈黙の都小平、それに対して学生、市民をおだてて暴力活動にまで追い込んだと報道している。両朝鮮の戦争、ベトナム戦、アメリカの世界制覇の夢は所々に飛火して失敗の連続とも知らせている。このように戦争の敗北とアメリカ経済の没落、中国政府にも謝罪していることを併せて報じていた。

中共は一党独裁ではないと報じている。日本の自民党みたくに共産党が第一党で、他は数党あつても代表権もない小党とのことだ。台湾の大統領選挙が三月二十二日、この前日までが大変、広場という広場は野党をとり巻く市の各大学学生や市民がのぼりや旗で大賑わい、私も知人の商店主に伴われて中正記念館に野党応援に出かける。台北、台中、台南、高雄等の大都会や中・小都市、町、村も学生中心に市民が動いたことを新聞が報じている。学生や市民が政治に注文をつける、市民が政治に参加することこそ本当のものになるのだ。七十七歳をうんと越えた私でさえ政治は私たちのものと思っている。学生諸君や若者たちが眠ってしまったら政治は政治家の独占物と化してしまふ。学生に学問は勿論大切よい就職口も大切。けれど肝心の政治が良くならねば、栄える国になれはしない。台湾の大統領選挙前の学生、市民のたくまし

い政治運動を見て、これから新しく生まれ替る国だと痛感した。

しかし台湾もいいことばかりではない。これまで国内平和は長く保たれていたのに現在は物盗り、強盗が頻発して、留学生の女の子たちが襲われることが日々のお来事、日本人をねらう者も多いという。もう以前の台湾とはうって変わってしまった。世界はアメリカカナイズされてピストル持参の強盗も多いとか。

ドイツが統一するとヨーロッパの脅威となるだろうと報じている。ドイツはドルの国ではなく、マルクの国である。ドルはもう空手形と同様のものである。その空手形のドルを後生大事にしている日本経済とはケタ違いの立派さを保つドイツ経済の独立性毅然たることも台湾で毎日のように報じている。

台湾は食大國である。又食道楽の國でもある。デパートに行くとき階に必ず一つの食堂がくっついている。食事時でもないのに人がそこに溢れている。街角の屋台も夜ともなれば色電球で一杯の人ばかりだ。

中共と台湾は既に交通も貿易も自由で統一も時期の問題ではないか、面積は月の表面と同様とも言われ、資源は地下に無尽蔵といわれている。そして人口は十二億を越えているという。ここに台湾の工業技術や経済力を持つていけば鬼に金棒、世界に匹敵する国もなくなるだろうと。

又こんなことを語る人もいる。かつてB29で日本攻撃をやったアメリカも、乗員はスリ

ップでガムを口にしていたそうだが、中国兵はコーリヤンの饅頭一個で山の中で数年の戦闘に耐え、輝く最後の栄冠を得た偉大な力、こんな偉大なものはないではないかと。

日本の若者こそ、その国の代表である。甘いチューインガムやチョコ、何十種ともあるジュースで幼少を育った特に日本の青年たちは脳細胞から骨の髄までいかれってしまったのか、享楽と繁栄をのみねらい、塾通いに明け暮れさせられる教育制度の中で、いやおうなく育てられ、君が代と「日の丸」の掛声の日本式教育法で幼稚園から大学まで押進める教育法で現在情熱の燃える世界の若者に太刀打ちできると考えるのか。あの台北の寮で熱弁ふるったドイツ留学生のいきいきした顔をいつまでも忘れることはできない。

拝観料を徴収している寺は台湾にはない。台湾の寺は光っている。それはその後ろに信仰の力があるからだ。日本も昔はこうではなかった筈、仏も神も金を集めなさいとは言っていない。この一事でも台湾の人と日本の人の違いを痛い程に感じる。末世とはこのことか。

台湾の国会議員七七〇名中国国民党は七〇〇名、純野党は三四名だそうだ。無投票で通過する国民党議員七〇名は七〇歳以上の高齢者で金持ちで、蔣總統が大陸から連れて来た本省人のみの独占で持ち続けているが、今台湾も大きく変わり行く過程で国民の票数比は五十五対四十五と相接

し、軍人も佐官級では本島の方が多くなっているとも聞く。間もなく逆転するかも知れぬという。

又台湾人はこう見ている。日本と中国の経済同盟には不可能ではないかという。それは例えば土を掘り起こすにも日本はロボットを、中国は十二億の人を使う。揚子江大橋にしても、地下資源発掘にしても安い労働力で大仕事を成就する。中国人はデモっている暇があれば槌を振う。中国には特殊階級はない、と言っている。

ゲルマン民族の統一は強い。その団結も同様、スポーツに於いてもオリンピックで両独の力は将に世界に冠たるものがある。アメリカもすぐ首の根っこに原爆を持つたひげの大将が存在する。妥協せざるを得ないこともある。世界の権想も刻々移る。

中共四川省から故里台湾に一時帰還した予備役に編入されたばかりの兵士の直接談を聞いた。

私は四川省在住だから天安門事件のことは直接見てはいないので判らないがと前置きして、アメリカの扇動に乗った一部の人が国家転覆を図ったらしい。市民への無差別発砲というようなことは全然ない。アメリカ大統領が先日にも都小平に詫言を入れるため政府詣りをしたではないか。

日本との戦争については戦争責任は国民には問わない。忘れてしまいたい。それより世界平和のため中日協力一特に日本の経済力、工業力を借りて現在も共同会社

を作りつつある。特に技術者は多く必要だ。中国にはどんどん入国して中国の実情を見てもらいたい。こんな話を私にしてくれた。

台北の山の手の土地、今日も銀行が買い占めるため日本から来ている。大ホテルを建設するという。台湾も又世界も動かしている日本の金力だ。台北政府の局長クラスの話だ。

本ものとうそもものニクソン米大統領(当時)が夫人と共に中国を訪問した。談話の末、ヒスイの彫刻品を観た。その彫刻の彫りのさま、光、つやのすばらしさに酔った。そして言う。私はアメリカにはあらゆる宝石があるけれど、こんな立派なものを見たことがないと。

ヒスイは自然石で合成などでまねの出来る石ではない。ある月の夜に激しい水流の底に光る青い光の石を見た。流れの中で永く磨き上げられ、削られてほんとうの光を放つ石これがヒスイだ。血の色を見せるのがヒ石(獣骨の玉)というそうだ。その土地の彫刻の名人が刀を入れ、その土地固有の彫りものが鋭い刀の下に生まれてくるのだ。ヒスイを商人が持ち帰って造つたものと全然異なるという。

今は中国の人民の食糧も決して豊富でもない。これを超えて、ホテルや鉄道のあるいは観光施設を完備して国家の土台を造りつつある。国家としては原子力を持ち、衛星もありで富んでいるが、人民は貧困だが今に追いつく、これを信じて進んで

いる。中国本土との統一を信じている本島人の話である。

日本人とユダヤ人とアメリカ人の三人の朋友があつた。ほんとにいい仲だった。さて彼らが商売を始めようということになり、他の二人に融資し、さて出発という時にこのアメリカ人は交通事故の為に急死した。日本人、ユダヤ人は各十萬ドル借金直後のことだ。驚いた二人は早速お見舞いを約した。先ず見舞いに出掛けた日本人はその枢の中に現金十萬ドルを入れて礼拝を終えて帰った。遅れて来たユダヤ人はお祈りを終えると直ぐ自分の小切手に二十萬ドルと記し、日本人の置いた現金十萬ドルをとり出して帰途についたというのだ。日本人の実直さ、ユダヤ人の狡滑さ、しかし現代その日本人がユダヤ人に代つてくれないように祈るといふのだ。

アメリカは建国二百年、日本は明治から見て建国百年、中共は毛澤東から四十年で現在の地位を得た。世界はたった四十年の中共をなぜこのように恐れるのか。中共びいきの本島人はこう私に言った。又彼は言う。資本主義は万人の栄える道なのか、弱肉強食の姿ではないのか。

ゴルバチョフは大統領となった。社会主義を捨てたのだろうか。レーニン、スターリンと積み上げた道はどうか。アメリカのブッシュの資本主義と同じ道を進むのか、ゴルバチョフ大統領よ。

まだ疑問は続く。天安門事件にしてもだ、十二億の人民はなぜ黙っているのか、鄧小

平一派のあの力を見逃しておくのだろうか、疑問は多く残る。

### 杜さんへの便り

私は七十五歳を越えた、余命は知れたものの、しかしこれからの子ども、孫たち、将来の民族のことども、どうなることか。

奇型の動物が多産されている。京都にも嵐山のお猿公園にも手や足のない子猿、川に住む魚も体半分や尾びれもないのも多く見られる。人間だけは特殊な生きものでこれらの被害者と無関係な存在だろうか。このままお茶をにごしていい問題なのか。

幼い児や若い青少年が色づけされたジュースを日に何本も飲む。ジュースは何十種も販売機で自由だ。これと菓子パンで昼食をとる若者も又多い。そんな食品なども放任で、文部省は君が代や日の丸を最優先させている。こんなことで教育はいいのだろうか。

杜進福さん、これだけでも台湾は日本よりも今日勝れているのです。又友人の趙貴来さん。お二人ともかつての日本軍人で戦争に狩り出され受傷されています。私は台湾の高砂族の皆さま、朝鮮、東南アジア、中国大陸の方々等々大借金が未だ未解決のまままで放任されています。

情けないことに私宛に京都市役所総務課から通知がありました。あなたは軍人関係の年金、恩給ももらっていないようだから

ら、この書類を作製して送付するようにとのことです。私は軍人のこれまでの行為は例え国の命令でやったことでも大きい罪悪だと存じていますので一切拒否していただきます。こんなものを私たち日本人に贈ることこそ日本国の不名誉です。それよりもこれまでの日本の犯した大罪を一日も早く天皇の詫言とその償いをしなくては日本国は再生できません。

杜さん、趙さん、私はこの償いの一日も早く行われることを祈ります。

日本の若い人たち、私たち大人はこのように世界の人々を苦難の道に追い込み、殺害、侵略の大罪を犯して来たのです。私たち若い者には関係ないと逃げることは出来ない罪業です。申し訳ないことですが許して下さい。

何も知らず戦死した千数百の軍人軍属、又爆撃で死んだ罪もない人々の魂に心より御詫び申します。これからは世界に奉仕し、経済大国の責務を担って行って下さい。もしこれを忘れたり又無視したら、日本国は消滅するよりないのです。

(本編終わり)

昭和三十九年広島県知事発行の父の履歴書では、昭和一五年一二月二等兵入隊 昭和二〇年四月第三百二師団転属、昭和二十二年七月復員と書いてある。同じく、厚生省発行引揚証明書には、昭和二十二年六月一日 舞鶴港二上陸セルコトヲ証明ス」と

ある。まさしく「悪夢」であっただろう。われわれ戦争を知らない世代にとっては想像すらできない。しかしその「想像すること」すら忘れる。そして「それ」がなかったかのように生きていくのは大いなる罪であろう。父の半生、いや当時の人間にとつて、人生そのものが歴史にもて遊ばれたのである。本書に書いてとおり、生前の父は軍人年金の受け取りを拒否し続けた。

これも書いてあるように日本政府の戦争責任に対する抵抗のひとつであったかも知れないが、ポツリともらした言葉が印象に残る。「僕は逃げたのだから」。

そして、父の語る残された私たちへの言葉は今現在でもそのまま当てはまる。何が変わつて、なにが変わらなかつたのか。

今号で「流転八十年」は終了します。しかし次号は父の記録から見た「シベリア抑留」とは何だあつたのかを総記してみたい。



## 大人の今昔物語(29)

石川 吾郎

今回は、長年連れ添った妻を捨て、若い女に走った男が、再び妻に戻る顛末です。和歌の威力の偉大さを感じさせます。大人の事情なので、教科書に出ない度は四／五。卑しからぬ身分の男、妻をすてた後、復縁する話し(今昔物語・卷三十一一)

今は昔、誰とは明らかにしないが、卑しからぬ身分の君達で受領を仰せつかつてゐる、まだ年若い者がいた。風雅を解して上品な男であつた。その人が長年連れ添つた妻から心が離れて、当世風の女のもとに通うようになってしまい、元の妻のことは忘れ果ててしまった。男は新しい女のもとにいづづけたので、元の妻はつらく心細い状態で暮らしていた。

男は摂津の国に莊園を領有していたので、遊びにとでかけた折り、難波の浦を過ぎるあたり、浜辺のたいそう美しい景色を眺めつつ進んでいると、蛤はまごの小さいものに海藻の海松うみまatsuがフサフサと生えているのを見つけた。「これはなかなか面白いものだ」と思い、取り上げて、「これを可愛がつている人に送って、楽しませてやろう」と男は考えた。そこで召使いの少年の中で気の利く者を選んで、「これを都の例の所に確実に届けて、『面白いものがありましたので、お見せしようとお届けします』と伝えよ」と命じて、都へやった。

召使いの少年は思い違いをして、新しい女のもとには行かず、元の妻の家に届け、

言われたことを伝え説明した。これを聞いて元の妻は、あまり思いがけなくこのような趣きのあるものをよこし、「私が都にもどるまで、これを大事にご覧ください」と言ってきたので、「殿は今はどこにおられるのですか」と尋ねる。召使いの少年は「摂津の国におられます。ついては、難波のあたりで見つけられた物をお持ちいたしましたのです」という。元の妻はこれを知ると、どうも不審で、

「これは間違つて届け先を誤つてここに持ってきたのだ」と疑つたが、何くわぬ顔で受け取り、「確かに承りました」と伝えさせた。使いの少年は摂津の主人のもとへとつて返し、「確かに送り届けてまいりました」と報告する。主人はつきり新しい女のもとへ届けたのだと合点していた。

届けられた元の妻は、これを見るに、実に興味あるものなので、盥たらいに水を張り、それを入れ、あかず眺めていたものだ。

そうこうする間に、十日ばかりして男は摂津の国から京にもどり、今の女に、「先日差し上げた何は、ありますか」と、得意顔で尋ねると、妻は「届けていただいたものなんてありませんから。どんな物ですの」と言うので、男、「いやいや、蛤の小さくてきれいなのに、ミルがフサフサと生えて出ているの、難波の浜辺で見つけて、なかなか興味があるので、いそいで届けさせたんだが」と言う。妻、「そんなものは一向に見ませんこと。誰に届けさせたんです。届いたらさぞ、蛤は焼いて喰い、ミルは酢のものにして食べたかったのに」と言う。これを聞いて、男は期待を裏切られ、しら

けてしまった。

さてその後、男は外に出て、使いの少年を呼びつけ、「おまえは、例の届けものをどこへ持っていったのだ」と問いつめると、召使いの少年は、勘違いをして元の妻の方へ届けた旨を答えたので、主人の男は大いに怒り、「すぐに取りもどしてこい」と責めるので、少年びっくりして、「大変なことをしてしまった」と、即座に元の妻のもとに行き、事情を弁解して伝えた。元の妻は、「やっぱり、届け先の間違いだつたのね」と思い、水に入れて見ていた例のものを、急ぎ取り上げて、陸奥紙の懐紙に包んで返させるが、その時、次の歌をその紙に書きつけたのだつた。

あまのつとをものはぬかたにありければ

みるかいなくもかえしつるかな

(意外な方から海のおみやげがありましたが、海松のついた貝を見る甲斐もなくお返しすることです)《注》「見る」と「海松」、「甲斐」と「貝」を掛けている。

召使いの少年は、これを持ち帰り、かくかくと経緯を報告した。主人は建物の外に出て、これを手にとつて見るが、様子は元のままだったので、「よくも無事だったことよ」とほくそ笑んで、家の中へ持ち込んで包みを開くと、包み紙に例の歌が書き付けてある。これを読むと男はジーンときてしまった。今の女が「貝は焼いてたべましょ、ミルは酢の物で」と言ったことが思い起こされて、一瞬のうちに心変わりをして、元の妻のもとに行きたいと思う気持ちがつつり、ただちにその蛤をもつたまま元の

妻の所へいつてしまった。さだめし新しい女の言ったことを、男は元の妻に語つたことだろう。

というわけで、今の女を忘れてしまつて男は元の妻と住んでいる。

情趣を解する人の心とは、こういうものなのだ。確かに今の女の言ったことには、いや気がさしたのだ。元の妻の心根には必ず夫を引き戻し、ともに暮らすようになる力があることだ、と語り伝えているようだ。

《コメント》

この話しに類したものは、現代のTVのワイドショーやバラエティにも溢れていますね。ただその方向性は幾分の違いと共通点があるでしょう。現代では女が男を選ぶ傾向が強い点は大きな違いのように思えます。他方で男が元の妻の奥ゆかしさより、直截的なセックスアピールに惹かれやすいという点、しかしあまりのあけすけさに対しては男の恋も冷めてしまうという点は、現代にも通じるところがあるのではないでしょうか。その道具だとして、和歌が絶大な効果をあげています。現代のメールでは、こういった機能はあまり期待ができません。

現代では女性のパートナーを簡単に換えることはどういできることではありません。捨てられた女もだまつて引き下がるわけはなく、必ずやドロドロの状態になるでしょうから。

なお新しい女が食べたいと語つた「ミルの酢の物」の写真がネットに出ていましたが、なかなか美味しそうなものでした。

## B級サラリーマン渡世譚(41)

明石 幸次郎

M居から再度投げられたボールが来たが、今度は落ち着いて「はい。工場の工務課に確認しました処、工場長が申し上げた四十五日の納期は日本と韓国とのモデルの兼用部品のことで、韓国だけの専用部品は六十日掛かるとのことです。

仮に今日、貴社から内示のオーダーを頂いたとしても、七月末頃に港指定倉庫渡しが、ベスト納期となります。一日でも工場への指示が遅れると、船積みが八月にずれ込み、韓国での販売時期も遅れ、商機を逸してしまふ恐れが出て来ます。先方のL/C到着が条件でしか、御社が発注出来ないとなると、弊社は、身動きが取れません」と明石は答えた。

M商事のI田が「明石さん、専用部品が六十日掛かるとはどういう事ですか?お宅の工場長が既に納期は四十五日と韓国の鄭さんに答えられているじゃないですか?」と痛いところを突かれた。

「兼用部品と専用部品の違いは、今回の該当モデルは二年前にモデルが新たらしくなり、部品も何十点かは新部品に変更になりました。変更になつていない部品は兼用品と称し、日本が変更になつている部品は旧品となり韓国の専用部品と称して、区分しています。我々メーカー側としては、

兼用部品は現行流れている部品で、一か月に部品メーカーに発注をしています、専用部品は、通常的に生産していない部品の為、納期が長くなり六十日とさせて頂いています」と明石は答えたが、I田は「明石さん、兼用、専用の区分はよく分かりましたが、私が知りたいのは、工場長が言われた納期四十五日は、偉い人が言われたかには守つて貰わないと、六十日と言われても韓国側が承知しないのではないですか?」

それを聞いてM居は「I田さん、俺は、通常でも六〇日掛かるので、少し余裕を見て、二・五ヶ月と韓国に五月に行った際も言つたし、見積もりにも記載している。その詳しい事情が分からない、ウチの工場長に、直接、日本語が喋れて、面識があるからといって、鄭さんが納期を問い合わせるのは、ルール違反やで。まあ、答えるウチの工場長も本来は我々、輸出部に答えさせるようにしないといけないのにー。まあ、どちらもどちらやが、明石、お前、これは、工場に頼み込んで何とか、四十五日に短縮して貰わないと問題が扱れるぞ」と何かしら、全ての問題を明石に押し付けるような言い様であった。

明石は内心では、俺は、昨日、転勤で堺の工場から輸出部に異動してきたばかりで、今までの経緯、納期等の諸般の問題は、M居とM商事のI田がやって来たことや

ないか！俺に言われても知らんわ！と思  
つてが、ここは押さえようとしていた感情  
が、M居の「問題が扱れるぞ」と言った言  
葉で抑えきれなくなり「問題は五月に韓国  
側と交渉をして、それから、L/Cが開設  
されないという事で、今日までに至りまし  
た。問題は韓国側にあると思いますが、弊  
社としまして、御社が腹を括って貰わな  
いと、仮に納期を四十五日でやれと言われ  
ても、社内的には我々の方から製作指示を  
出さないと工場は動くことが出来ませ  
ん！御社が今日、仮のオーダーを出して頂  
ければ、直ぐにでも、宇都宮工場に行つて  
直談判して来ます。それが、一日でも遅れ  
ると、M居が申し上げました様に御社との  
関係も含め、韓国との関係も扱れると思  
います」と本来、M居が言うべきことを代弁  
して、M商事の決断を求めた。

それを聞いていたI川課長は「I田さん、  
ソウルのI藤君に電話して、直ぐにでもD  
工業とソウル事務所へ決断をするように  
説得してくれ！M居さん、明石さん、分か  
りました。ここまで、問題を結果的に放置  
してきた我々にも責任がありますね。韓国  
側の事情は、我々の商社が一番に理解して  
もつと早くD工業と交渉して、御社に対し  
ても迷惑を掛けられない様にするべきであ  
りましたね。今日は、よく我社まで来て頂  
いて、事情を聞かせて頂きました。M居さん、  
I田が責任を持って進めますので、明石さ  
んに御社工場との交渉を進めることを宜  
しく頼みます」と答えた。

M居は「I川さん、それでは、明石にこ  
れから宇都宮に行かせますので、御社の注  
文書を頂けますか？書面は後でも良いの  
で、口頭で聞かせて下さいよ」と言質を取  
ろうとした。

I川課長はI田がソウルに電話するた  
めに席を外しかけると「I田さん、日本倉  
庫のK上さんをここに来るように言つて  
くれますか？」と指示した。その後、おも  
むろに「M居さん、分かりました。ウチも  
リスクを被り、オーダーを出しますので、  
バングラの口銭不足分を韓国で上乗せを  
お願い出来ませぬか」と

M居はN川の方を見ながら「N川、そう  
いう事でバングラの件も決まりや！後は、  
韓国の件、正式オーダーを貰うだけや。明  
石、お前、日本倉庫のK上さんと、挨拶し  
た後、直ぐに宇都宮に飛んでくれ。ここか  
ら大宮まで行つて、東北新幹線に乗り換え  
たら二時間あれば、宇都宮に着ける。7月  
末頃にM商事さんの横浜港指定倉庫渡し  
が可能かどうか？と言うよりも、是非、可  
能になるように交渉して来てくれ！それ  
で、今日の歓迎会には遅れるが、仕方がな  
い、仕事優先や。幹事のN川、エエなあ」と  
N川は「明石さん、大変ですね。M居さ  
ん、明石さんは、昨日、転勤されたばかり  
ですよ。しかも今日は、明石さんの歓迎会  
なのに、それに遅れるとは、気の毒だと思

いますよ」と明石に同情を示してくれた。  
明石は、I川の気持ちは、嬉しかったが、  
ここは、自分の工場での経験を生かして、  
宇都宮工場に行つて直接直談判すれば、何  
とかなるのではないかと、楽観的な気持ち  
になった。

応接室の扉がノックされて、坊主頭の人  
が扉を開けて、ニコニコ笑いながら入つて  
来た。「M居さん、N川さん、お早うござ  
います。今日は新しく転勤された方がご  
挨拶に来られているという事で、お邪魔致  
します！明石さんですか？M商事さんの  
乙仲をさせて頂いております、日本倉庫の  
K上と申します。はじめまして。御社の宇  
都宮工場の工務課、物流課さんには、色々  
とお世話になっております。この度は、M居  
さんの後任で韓国を担当されるとお聞き  
しました。短納期で大変だとI田さんか  
も既に聞いていますが、今回の韓国向けC  
KDは、既にパッキングリストは、ほぼ完  
成しています。あとは、何時、御社の工場  
にコンテナ二〇数本を、何時から分けて着  
けさせて貰うかですが、これも、先週、宇  
都宮工場に出向かせて頂き、物流のK定さ  
んと大体の段取りは、打ち合わせさせて頂  
いております。K定さんは、あとは輸出部  
の指示待ちやなあ」と、仰つてました」  
M居は「いつもK上さんは、手回しがエ  
エなあ。明石、工場からの出荷、輸出手  
続き、それと船積みは、このK上さんに任

せておけば、間違いないわ。今回も工場か  
ら港までの運搬はK上さんの処で決まっ  
たんやなあ？」

「そうです。決めて頂きました。有難う  
ございました。M居さんが大分、ウチを推  
して頂いたと聞いております。お礼申し上  
げます」

明石は、詳しい経緯は分からなかったが、  
第一印象として、K上に、好感を持った。  
「明石です。この度は、M居から引き続き、  
韓国を担当させて頂くことになりました。  
この後、早速ですが、宇都宮工場に出向き、  
納期短縮の直談判に行つて来ます。又、工  
場との打ち合わせ、引き続き宜しく願  
います」とK上に頭を下げた。

明石は、応接から電話をして、宇都宮工  
場の工務課に午後一時半過ぎに訪問する  
ことを伝えて、途中で席を立ち、M商事を  
出た。

時計を見ると十一時半であった。思わぬ  
展開になつてしまつたが、最後に会つたK  
上が、工場からの出荷の実務的な根回しを  
進めてくれていることを聞いたので、大い  
に勇気づけられて、大手町を後にして宇都  
宮に向つた。



## 困了生

先回、紹介した「枕草子」八十七段（岩波文庫による。以下、段数はすべて岩波文庫による）には「常陸介」の話題の他に「雪山の賭け」についてのくだりがある。

この「枕草子」八十七段にくだわるのは、この段が平安中期の庶民の姿が多く出てきていることにある。平安後期の説話物、たとえば「今昔物語」には民衆も多く登場するが、「枕草子」や「源氏物語」が書かれた時代の文芸作品に庶民の姿を求めるとは難しい。高級なフランス料理店に入つて冷奴を食いたいと言っているようなもの。正直に言えば、「にげなきもの、下衆の家に雪の降りたる（似合わないもの、身分の低い家に雪が降り積もっているもの）」（四十五段）とか「かたはらいたきもの、下衆どものざれあたる（いたたまれない感じのもの、身分の低い者たちがふざけているもの）」（九十六段）とあるように清少納言自身は庶民に対しても好感度は概して低い。しかし、この八十七段には多くの身分の低い人たちを清少納言は登場させている。その点が筆者の興味をひくのだ。

さて、記録によれば長徳四年（九九八）十二月十日、都では大雪が降っている。その日、中宮定子のいた職御曹司では清少納言の発案により中宮職に務めていた人々を総動員して積もった雪を集め高い雪山を作った。雪山作りが一段落したあと、中宮や女房たちの間で、この雪山がいつまでもつかが話題となった。中宮や女房たちの多くが年内に消えるだろうと予想する中で清少納言が心の内では「年内といえよ、消えなかつた」思いつつも「来年の一月十余日まではある」と強く主張する。このあたりが「でしゃばり女、目立ちたがり女」などと古来いわれてきた清少納言の面目躍如といったところだが、一度、言い出したことは引き下がれない。こうなると単なるおしやべりから「賭け」のようになった。清少納言は何としても一月十五日までは雪山があつてほしい強く願うようになる。ところが、年が明けると中宮が職御曹司から内裏に参入することになったり清少納言自身が実家に戻らねばならなくなつたりといった事情ができた。例の雪山が気になるが、見続けることはできない。そのため、清少納言は職御曹司で住み込み庭木の番をしている「木守」に中宮から褒美を与えられるといつて雪山の見張りや防衛を頼み、中宮定子のもとで召し使われていた庶民の女性たちに「木守」との連絡を頼んだのであつた。

「雪山の賭け」に勝利直前の一月十四日、雪山はまだ確かに存在していると清少納言は報告を受け取っていた。しかし、翌朝になると雪山はきれいさっぱり消えてしまったのである。いたずら心をおこした中宮定子が夜のうちに従者に命じて片づけてしまったのだ。そして、話としては「おまえに勝たすまいと中宮が思いだつたのだろうよ」と主上がお笑いになり、その場が笑いにつつまれたということと終わっている。

さきほど、この八十七段には多くの一般の庶民が登場すると筆者はいつたが、この段に取り上げられている庶民をあげてみようか。すると以下のようになる。

まず、先回、紹介した女老法師の「常陸介」。そして、木守、里なる侍、台盤所の人、下種、公人、樋洗、長女、下人である。「里なる侍」とは自分の持ち家に帰つた従者のこと、ただし「侍」とあるからには六位以上の位階を持つた最下級とはいへ貴族の一員である。「台盤所」とは台盤つまり「お膳」がおいてある所。「下種」は「下衆」「下人」と同じ。「公人」は内裏に仕える公人の意で「樋洗」「長女」も「公人」の一部である。「樋洗」は湯屋や便器等の洗浄を勤めとする下女、「長女」は宮中で雑用に使われた下級の女官のことである。ただし、「長女」は宮中で下女たち（雑色といわれた）を統率する立場の女性だったかもしれない。もちろん、中宮定子のまわりには女房とよばれる女たちもいた。しかし、彼女たちは貴族層に属する従者であり、彼女たちは決して便器を洗うなどの仕事はしていない。公人・樋洗・長女といった庶民層に属する従者たちがいなくては、まず天皇の妃といえども平穩で普通な日常生活は送れなかつたに違いない。

言うまでもないことだが、内裏に出入りしている庶民層の男女の中ではしつかりとした上下関係があつたらしい。たとえば、中宮定子に仕えていた庶民の一人が清少納言の使いで木守に正月七日の節句のお下がりを届けた日に、その場で木守から伏し拝まれたという。しかも、そのことで清少納言と一緒に同じ女性である木守のことを嘲笑つたという。原文では「七日の節句のおろしなどをさへやれば、拝みつることなど、笑ひあへり。（七日のお節句のおさがりなどをまで与えたところ、庭木番が拝んだことなど、一緒に笑い合つた）」とある。念のために余計なことをいえば「やる」とは古語では離れた距離にある者に与えるの意である。飼犬にでも与えるように投げ与えたのであろうか。おそらく同じ庶民層ではあるが内裏の建物に出入りすることのあつた庶民層の者は外で寝起きしている木守よりは、はるかに強い立場にあつたであらう。貧しい庶民に最も冷淡なのは、いくらか恵まれた庶民であるという構図は今と変わらぬという点は悲しい。

ことのついでに、いま話題にしている木守の住環境についていえば、「枕草子」の中では次のように書かれている。

「木守といふ者の、築地のほどに廂さしてゐたる（築垣のあたりに廂を構えて住み込んでゐる『木守』とよばれる者）」

「築地のほどに廂さしてゐたる」とは、築垣（築地塀）のあたりにあつた「廂」と

呼ばれる建物であつたらしい。「廂」とは「二遍聖絵」などに多く描かれた乞食たちの起居する工物とよく似た片流れの屋根だけしかないような簡素すぎるほどに簡素な建物であつたらう。広さは畳一帖ほどで、地面にムシロを一枚敷いただけであり、どうやって寒さをしのいだかは想像もつかない。その建物とはとてもいえない建物に住み職曹司の敷地の片隅で野宿同然の生活を送っていた木守のような住込みの使用人のその後は、また、別の機会に述べるつもりである。それにしても悪戯好きの中宮定子の気まぐれから御褒美がもらえなくなった木守が半狂乱になりながら言った次の言葉に対して私たちはどう答えたらいのだろうか。

「昨日、いと暗うなるまで侍りき。祿たまはらんと思ひつるものを。(昨日の夜おそくまでは確かにありましたのに。めったにない御褒美をいただけると思っていましたのに。)」

以上で今回の話の材料はほぼ尽きるが、ここで十世紀末の平安京の概要とそこに住む人々について少し述べておきたい。

十世紀末とは清少納言が生きていた時代であり、歴史家が王朝時代と呼んでいる時代である。この時代、日本全体の人口は六百万人ほどであると推計され、平安京には十万人から二十万人の人が住んでいたという。いわゆる貴族とその家族、従者は一万人ほどであり他は一般の庶民であつた。その庶民の大部分は貴族を雇用主とす

る者とその扶養家族であり、一部は朝廷に兵や職人、下働きとして雇われていた者もいた。考えてみれば朝廷も貴族によつて動かされていたのであるから、結局は貴族たちに従属することによって都城に居住する庶民たちは食い扶持を得ていたといつてよいだろう。つまり、平安京とは朝廷を運営する貴族たちが集まり住むだけに造られた産業とはまったく無縁な都市、恐らく日本で唯一の一大消費都市であつた。そして華やかな王朝世界とは対極的に都大路の路頭には雇用主から見放された病人、そして飢饉や疫病を逃れて近郊から流れてきたホームレスの人たちが多くいた。

これらのことはひよっとしたら華麗な王朝時代のイメージを覆すことかもしれない。ただそうしたイメージから一歩抜け出すと、その時代を生きた人々の思わぬ姿が現れてくる。筆者としてはそれをできるだけ見ていきたいと思つているが、寄り道ついでに一例を挙げよう。記録を残したのは紫式部。「紫式部日記」の寛弘五年(一〇〇八)十二月三十日の記事にある。教科書に載らないことは請け合つてもよい。

大晦日の夜、式部は彰子中宮の部屋の方でとんでもない叫び声をするのを聞いた。同僚の内侍を叩き起こして式部は中宮の部屋に急ぐ。中宮は無事であつたが一糸まとわぬ女性が二人うずくまっていた。靱負つげいと小兵部だ。二人とも中宮にお仕える女房であり、小兵部は式部の親族でもある。盗賊は宮中深く侵入し二人の女房の衣服

を残らず剥ぎ取るとすばやく逃げ去つたのであつた。警備の者が誰一人残つていなかった中で式部はテキパキと善後策を講じ、裸でふるえている二人の女房には中宮から装束を与えていただいた。正月用の装束は無事であつたか、翌日くだんの二人は何もなかったかのようにふるまっていたという。この話の末尾にある式部の感想がいかに紫式部風でおもしろい。「二人は」さりげもなくあれど、裸姿は忘れられず。『おそろしきものから、をかしう』とも言はず。(何事もなかったかのような顔でお仕えしていたけれど、私にはあの裸姿が目には焼き付いている。「恐ろしい、でもなんだかおかしい」だけど、それは黙つていよう。)

時の最高権力者藤原道長の娘である彰子中宮の御座所にまで侵入してくる盗賊、すべてを剥ぎ取られて震え上がっている女房二人。この話は私たちが抱いている王朝時代のイメージを少しばかり書き換えてくれるのではないだろうか。同時にヨシズヨシズの穴からのぞくがごとき頼りなさではあるが、遙か昔の人たちの有り様が見えるようではないか。人の趣味に付き合うほどヒマではないと言われる向きも重々わかっているが、ダラダラと相撲取りの長褲のごとく書き連ねていく筆者の試みにしばらくはお付き合い願いたい。なーんて、ね。

## 英国コッツウォルズウェイを歩く

富田 保子

今回六月八日から二十七日まで十五日間をかけて、英国南西部のコッツウォルズウェイを夫婦二人で歩いてきました。二〇〇七年に国定トレイルに指定されたので、北のチピングカムデンから南のバース迄、一〇〇マイルの道の標識や道は整備されていた。放牧地や耕地、それにウッドランドと呼ばれる森林地からなる丘陵地で、一番高い所でも三一七メートルである。残念ながら水のある風景は数か所しかなかった。

この地方の羊毛はすでに十一世紀頃からその品質の良さで広く知られ、十四世紀には国外にまで輸出されていた。そしてその富で各地に教会が築造された。またこの地方特産の黄色味を帯びた花崗岩を使って続々と立派な民家が建てられていくようになる。ある料理家が神戸牛作りの名人にそのコツをたずねたところ、「ひたすら牛にストレスをあたえないこと。居心地の良い場所できつくり休ませ、安全でおいしい餌を与える。これだけです。」との返事。確かに実にゆつたりゆつたりした放牧風景である。高品質の羊毛むべなるかな。

羊、牛、馬は人を恐れない。すぐ目の前に悠然と構える牛に、私の方がたじろぐ。上質の草なのであろう。その糞は無臭、中を割れば緑。所有者の好意で広大な私有地を通過させてはもらえないもの。その中

## 米国紀行

河原林 成行

に糞が散らばっていて歩きにくい。大麦やそら豆などの大耕地も通過が許可されているが、道幅が非常に狭く、バランスを崩すと大麦畑にまっさかさま。とくにぬかるみ道では畑の泥が靴底に何センチもくつきこれまた大変。ただ、一匹の蛇も虫もないのが救いだっただ。

それにひきかえ、ブナなどの林は素晴らしかった。下刈りが徹底されてきたのか、樹が高く大きく、それに適度の樹間があるので、爽やかそのもの。忘れ難い。このトレイルの近くに、趣ある古い街や、紀元前何千年もの遺跡があったり、十三世紀にジョン王の息子が建造した大寺院の廃墟があったり、ヘンリー八世の妃が住んだという壮大な城や庭園があったり、十六世紀に聖書を英語に翻訳したデインデルの記念碑があったり、ローマ人の侵略の名残りがあつたりするのである。

ほとんど全行程で小鳥のさえずりを耳にし、しあわせだったが、宿を予約したので、天気予報が豪雨でも雷雨でも、一日たりとも休まず歩き続けねばならないとか、毎日のごとく雨に降られ、またスマホの電波がうまく入らなかったりして、なかなか苦勞の多い旅でした。

はじめに

本小文は、一九九七年に米国へ海外旅行したという何の変哲もない旅日記をベースにしたものです。当時は忙しさ等のために少々雑で他の人には意味不明なメモのようなものになり、とても人様にはお見せ出来ないとしまい込んでいました。しかし、「退職して時間ができたら、『読む気になつていただけけるもの』になるように見直そう」と考えていたものであり、大学時代の友人の勧めもあつて実現したものです。

国際化の進んだ今日、米国への旅行や出張は日常事ではありますが、二〇年前の一事例として気楽に読んでいただけたらと思います。そして、実際に何かのお役に立てば望外の喜びです。

また、この改訂文を作成中に次期米国大統領に公職の経験がなく、選挙中の過激な発言で世界をハラハラさせたトランプ氏を選ばれました。本紀行文にあるような日米を含む世界の秩序が保たれることを祈らずにはいられません。

### 1. プロローグ・夏の夜話

藤田様

Aug. 17,

残暑お見舞い申し上げます。

ハガキ有難うございました。不順な天気が続いていますが、お元気で活躍されてい

るものと思います。

さて、去る五月にフォード社の友人の結婚式に招待され、妻と二人で子供三人を放つたらかして、日本では野球の神様といわれ、幾多の伝説のあるベールブルースが活躍した所としても有名なボルチモアへ寄つてきました。

フォード社の友人というのは、私が自動車の自動運転ロボットの開発を担当していた一九九〇年に、有名なマサチューセツ工科大学の三回生で、我々のプロジェクトに研修にきていた美人のネディン・レグナーさんです。六月から八月のわずか三ヶ月間で、我々も非常に忙しく、特に何もしてあげられなかったのですが、大の「日本びいき」で日本語も達者でした。

藤田さんにも無理を言つて舞鶴工場の溶接ロボットを見学させてもらったあの女性です（海水浴のついでに?）。彼女は卒業と同時に米国の自動車会社の中のピッグスリーと呼ばれるフォード社に就職し、三年後に再びその日本支社（広島市）へ来ていました。夫となるジョン・アツタマンとはデトロイト勤務時代に知合い、勤務の都合で一時は広島とロンドンと離れていたこともあつたようです。

処が突然、ご両親から正式な招待状をもらい、本人の「どうしても来てほしい」という有難い強い要求もあり、好奇心も手伝つて、思い切つて行つてきました。彼らは日米間の距離などさほど気にしてないようです。気軽に(?)呼んで下さいませ。

こちらはスケールも小さく、一大決心(?)をせにやならぬのに。米国は初めてでした。

結婚式は、ボルチモア郊外の小さいが百の伝統(?)を持つ教会で行われ、披露宴は、そこから七キロ離れた Mt. Washington Convention Center で行われました。

結婚式は厳粛に行われましたが、披露宴はマア〜大変。パワーフルなものでした。まるでデイスコ会場のようで、とても付いていけません。

ネディンのご両親・姉さんを初め家族や親戚の方にはとても感謝され、丁寧に扱つて頂きました。郊外のホテルまで送つてくれたり、次の日にニューヨークへ行く時には、ワシントン D. C. への北からの進入玄関であるボルチモア・ワシントン国際空港まで送つてくれたり、色々と初対面とは思えないほど面倒をみてくれ、付合つてくれました。

日本人ということで、多少敬遠されるのではないかと危惧していましたが、皆さん「I like Japan」と言う方達でした。ですから、多くの人と出会え、会話をすることができました。この時ほど「もつと英語がしゃべれたらなあ」と思ったことはありません。懐かしいボルチモアをあとにし、ニューヨークへ行く時にボルチモア・ワシントン国際空港まで送つてくれたネディンの親戚（姉さんの嫁ぎ先のご両親）のレフコピッツ夫妻と別れる時には、我々は少年・少女のように、別れるのが本



当につらいものでした。本当に、少年、少女に戻ったような気がしました。

こんな気持ちになったのは何年ぶりでしょう。とても懐かしい「臭い」がしました。「また来ます。See you again.」と言った。その短かい間でしたが、本当に去り難い人達ばかりでした。今も十四時間向こうでは彼(彼女)らが生活していると思うと、一瞬、「(こはど)だ?」と思ってしまう。

ついで(?)に行つたワシントンD.C.とニューヨークの話を書きます。ワシントンD.C.に行つたのは五月二日(金)(現地時間)で、たまたまぬけるような五月晴れでした。ご存知とは思いますが、広大な広場には各種記念館、アーリントン国立墓地やホワイトハウスや国会議事堂を初め政府官公庁が並んでいます。

独立戦争や基本的人権を勝ち取り、新しい世界を築いていった有名・無名の諸先輩の見つめるこのような場所こそ、大袈裟に言えば世界の政治を行うのに相応しいのを実感しました。やはり実際に行つてみるとTV・新聞等で見るのとは迫力が違いますね。明治時代に訪米した人たちも同じようなことを思つたのでしょうか?

ワシントンからボルチモアの宿へ帰るのに、飛行機が発達した米国では珍しい鉄道(MARC Train)を利用してみました(ユニオン駅→ペンシルベニア駅(Union St.→Penn St.))。

ニューヨークではこの国の経済・文化

の強さをこれまた見せ付けられた気がします。二泊したのですが、初日に「市内一日観光バス」に乗り、一巡しました。最初は、ゴチャゴチャした、ただ高層ビルが立ち並ぶだけのどこにもある普通の街だ

など思っていました。処が、色々知っていくうちに、やはり世界をリードする凄いい街であることが判つてきました。余談ですが、ニューヨークではフォード、トヨタ、ホンダ車がよく目につきました。まだまだ話は尽きませんが、今回はこれくらいにしておきます。

ビジネスでの出張や観光地巡りとは一味違つた経験ができました。もつと若いうちに経験しておけばとも思いますが、今だから理解できることも多々あると思います。

また、米国東部メリーランド州の州都ボルチモア郊外の宿「ザ・コンフォート・イン」もニューヨークの超高級宿「The Hilton & Towers」とは違つて生活臭がしてよかったですよ。若い黒人の従業員とも知合いになれたしね。何せ、ニューヨークの一泊分あればボルチモアでは三泊できるのですからネ。

それでは、「夏の夜話」はこの辺で。後日談・続きをお楽しみに…。  
処で、このメールはこの七月に加入したNTT・OCN(ISDN回線)で自宅から発信しています。

## 孫ウオッチング(12)

福田 圭

二〇一六年一月二十八日(月)

以前に、「六、七か月までの乳児期前半に比べ、一歳半頃までの乳児期後半は、比較的安定した成長を示す。」と書いた。顔立ちよりはよりしっかりしてきたが、外見の身長も体重も以前のように大きくなつていない。じいちゃんとは相変わらず人見知りをされて、日ごろの元気が見られないという。歯の数は八本のままである。「歩く」「話す」という飛躍はただである。積み木を前にプレゼントしたが、口に入れてなめているという。ポタ電池などを飲み込まないように注意してあげる必要のある時期である。

それでも、日頃つかまり立ち、伝い歩きをして動き回り、引き出しを引つ張り出したり、ティッシュボックスからティッシュペーパーを次々引つ張り出したりするようになったという。そう言えば、光君の父親も同じことをしてたつて。ごみ箱をあさるのは、それ以上に「発達」をしているのだろうか?

子供は成長していくのに、こちらはと言えば、夏に旅行をしたときには「夏物の上着」を忘れ、秋に旅行をしたときにはケータイを紛失し、「オイルショック」ならぬ「老いるショック」は否めない。しかし転んでもただでは起きない。「二つ折りケータイ」のまま「スマホ」には手を出さないつもりでいたが、これを機

に「スマホ」に機種変更し、息子に「ライン」などというものを教わつた。光ちゃんの可愛い写真を送ってもらい待ち受け画面にして悦に入っている。そんな私を光君は静かに「ウオッチング」しているのかもしれない。

## 編集後記

いよいよ師走です。商売人は節季で金やりくりで苦勞します。新たに富田さん、河原林さんが寄稿して頂きました。

先日、外国の文学者が福島を訪れて「日本には抵抗の文化がない」「みんなが団結して抵抗することをしない」と言われた。ロシヤも同じであつたと言われる。どうしてなのか。一説では、織田信長が一向一揆を焼き討ちした時から日本人は恐れをなして抵抗をしなくなつたとか…。

抵抗することが悪いと考える風土を変えないと。トランプさんが大統領になれば、不景気になり戦争になると予想する人がいる。日本も自立しないと巻き込まれてしまう。戦争の流れに抵抗することは悪ではない。臆病になつて黙つておくことこそ悪ではないだろうか。人のおもしろさとは、臨機応変に対応して生きていく姿です。少し見方を変えるだけで争いをせずに仲良く出来ます。「芥川だより」はその根底を問ひ続けます。今年も「愛読ありがとう」ございました。良いお年をお迎えください。来年もよろしくお願ひします。

ありがたい

「子のために 生きる命を思いしに 子に生かされし我なりしかな」若くして夫を亡くした友

忘れ形見と老いた姑をかかえて、どう生きてゆくのか「いつそ死んでしまったら」と何度も考えた。

あどけない子供の顔、いつもさえない表情の姑の顔、歯を食いしばって、共に苦しみを分け合って来たけれど。

「きつと春が来る」と思って。

九〇才を過ぎた今、こんなに元気で暮らしている姿をどう見てくれるのか。久しぶりに丹波へゆき、友に出会ったひととき。

「ありがたい」と言葉をのこして元気で走り去ってゆく友の姿を追う。自分も九〇才。

老いの知らせは誰から

「二、三日前にお願ひしたんですけど」と言われてハッと我にかえった。でも何をと、あせればあせる程わかない。

何事もなかったように気持ちを押しさえたけれど、今でも思い出せない。

老いは自分の内側から訪れるというより、むしろ他人によって運ば

れてくるのだ。

乗り物の中でも、すぐ座席をゆずって頂きありがたい。老いた自分が疲れた表情で立っている姿を見る人も哀れに写っているのだ。好意は素直に受け入れて、「ありがとう」と言葉をいれる。

或る日、同年配の友と電車に乗った。立っている客は多いのに隅の優先席が二つばかり空いていた。人をかき分けながら、何とか席に「すみませんネエ」と。

これも自分を納得させるための手続きだったにちがいない。

昔の人は、もう少し素直に老い進んでいったような気がする。今は老いのステップがぼやけ、自分が階段のどのあたりに立っているのかがはつきりしない。だから他人さまが、それを教えて下さるのだと思うが。

問題はチャンス

「なんだつてあの人は、ガンコなんだろうか」「何が」「そりゃもう、ヘソを曲げたらテコでも聞く耳をもたないよ」

出合いがしらにプンプンとぼやく。

「好きなようにさせたらいいじゃないの」

中味が不明なままで黙って聞いていたら一向にスイッチが切れない。

人は自分を映す鏡、自分も頑固とは気づかない。お互いを知るチャンスなんだけれど、一步もゆずらない。ちよつとコトバに変化をつければ、問題は勝手に理解していくんだけれど。

チャンス、チャンスを待とう。

考え方が古いのか

タライから洗濯機になった。ローラで洗濯物をはさみ、ハンドルを廻して水をしぼるものだった。その後、次々と新型が登場し、短時間で行う「全自動」乾燥まで。まだ一度も買ったことがない。便利でいいと聞かせられても。

洗いと脱水が別々の二槽式を愛用している。私はその時間に忙しく、好きな事に夢中になりペンを走らせているかも…。

すすぎの水が満タンになって機械は止まり水の出っ放しという事も再三。ああもつたいないと思いがらも、これでいい。不便さを感じない自分。二槽式はあまり店頭でも見かけないけれど根強い人気があると聞いている。私と同じ古い考えの人がいると思うと何となく心強い。

俳句

土田裕

夕刊を夕べに読みて日短か

歳晩や動く歩道をかける人

二次会も無くて別るる年の暮

ふぐ鍋を囲み久闊叙しにけり

クリスマス妻から夫へ贈り物

影山武司

雪吊の縄を吹き抜け風の鳴る

雪吊や松の上より声のして  
安産を空に祈りし小春かな

寒天や剃髪の跡青き僧

冬の橋轟と超え行く市電かな  
たれかれに

告げたきことあり賀状書く  
数え日の数ふるごとに赤子肥ゆ

また一年余命減りたる晦日蕎麦  
深山の静寂を破る除夜の鐘

音立てず頁を捲る去年今年